

第2分科会「子どもの発達に関する課題」

～小中連携（コミュニティ・スクールを取り込みながら）で、子どもの発達を促す～
～小中・地域・家庭をつなぐ教頭の役割～

下関市立川中西小学校 奥原辰政

1 主題設定の理由

子どもたちの発達は連続しており、子どもたちのよりよい成長に向けて、9年間を見通した教育活動の展開を図るとともに、校種間の連携を積極的に進めることが求められています。そこで、本研究では、これからの小中連携の姿やコミュニティ・スクール、地域教育ネット等を生かした小中連携の推進における教頭としての役割について研究を深めるために本主題を設定しました。

2 地域・支部の実態

下関市には、52校の小学校と22校の中学校があり、各学校の置かれた状況や地域の特色も様々です。このような状況の中で、平成24年度には、全小・中学校にコミュニティ・スクール運営協議会が設置され、「地域とともにある学校」づくりの具体化に向け、各学校や地域の特色を生かした取組を進めています。また、各中学校区においては、学力向上や生徒指導上の課題解決に向けて、小・中学校が共通テーマを設定し、連携・協働した取組を進めています。

3 研究のねらい

研究1年目の本年度は、各中学校区における小・中連携やコミュニティ・スクールの現状、また、組織づくりや運営等の実態を把握するとともに、小中、地域、家庭をつなぐために求められる教頭の役割に焦点を当て研究を進めることとしました。

4 研究の内容

(1) 垢田中学校区の取組

① 垢田中学校区とは

垢田中学校区は南北4km弱、東西2km弱の範囲で、垢田中学校、垢田小学校、川中西小学校と、隣接した位置関係にあり、地域教育ネット(中学校区コミュニティ・スクール運営協議会)を発足させた校区の一つです。

② 垢田中学校区地域教育ネットについて

この3校が、まずは小中連携でつながり、小小連携で横のつながりを深め、「垢田中学校区3校合同コミュニティスクール運営協議会」の一步を歩み始めました。この「3校合同コミュニティスクール運営協議会」は、「知の部会」と「徳の部会」、「体の部会」の3領域を有し、中学校区における「目指す子ども像」を共有し、協同に向けた取組を進めていく組織です。

③ 3校合同地域研修会による熟議

熟議では、「地域教育ネット」に関する知識・理解を深めるとともに、「目指す子どもの姿」について話し合い、その全体像につながるスローガン「CSのテーマ」を考えました。

④ 垢田中校区小中連携教育研修会

この研修会は夏季休業期間中に行われました。AFPY研修と、県内の先進事例として「浅江中の取り組み」のビデオ視聴、それからグループ別意見交換という内容でした。小中が共有できる児童像を、教師の目線で話し合うことができ大変有効でした。



(2) 下関で行われている実践

①「知」の領域 「安岡中学校区」の実践から

安岡中学校区の小中連携では、共通テーマを「小中連携による学習指導の一層の充実と学習習慣の確率による学力向上」としました。3つの共通取組「めあての提示」「音読」「授業評価」を小中学校の全教員が全授業で進め、授業改善と意識改革を進めました。小中合同の研修会では、10のグループ別研修を進めており、学力向上を柱とし、さまざまな角度からのアプローチで連携推進を図っています。

②「徳」の領域 「山の田中学校区」の実践から

山の田中学校区では、「大切な自分のために」「大切な仲間のために」「大切な命のために」「大切な学校・地域のために」の項目で「10の誓い」を設定しています。当たり前なことを当たり前、計画的に、継続することが大切になります。このような様々な取組が下関市全体に広がれば、よりよい小中連携ができます。

③「体」の領域 「長府中学校区」の実践から

長府中学校区では、南海トラフ地震が起こった際の津波を想定して、「小中合同避難訓練」を実施しました。消防・警察・地域と連携して安全に避難させました。また中学生の出迎えにより、運動場に移動しました。さらに、後日「長府地区の防災を考える」熟議を様々な参加者のもと実施しました。

小中のなめらかな接続 「わたしたちの10の誓い」(山の田中校区)

大切な自分のために

- 1 夢や目標の実現に向かって、たゆみない努力を続けます。
- 2 うそはつかず、わがままは言わず、がまんする強い心もちます。
- 3 きまりを守り、時間を大切にします。

大切な仲間のために

- 4 笑顔で元氣よく、進んであいさつをします。
- 5 たがいの気持ちを思いやり、いじめは決して許しません。
- 6 相手の気持ちを考え、人の話はきちんと聞きます。

大切な命のために

- 7 お互いの命を尊重し、生き物や自然を大切にします。

大切な学校・地域のために

- 8 そうじに一生懸命、無言で取り組みます。
- 9 きれいな町づくりのために、協力し合います。
- 10 地域の人たちに守られていることに、感謝します。



5 成果と今後の課題

(1) 教頭の役割と課題

① 教頭の役割

- ア 小中連携のための研修会や学校運営協議会等を企画・運営すること
- イ 小中連携・小中連携、また、校内の各係との連絡を密にし、様々な活動が円滑に行えるようコーディネートすること
- ウ 地域の情報を集め、それを学校の活動に生かすとともに、地域へ学校の情報を発信し、理解や協力をお願いするなど、地域と学校を結ぶインターフェースの役割を担うこと

② これからの課題

- ア 多忙感を感じている教職員は多く、コミュニティ・スクール等「またしなければいけないことが増えた。」というやらされ感、大きな課題です。しなければいけないのならそれを利用して学校の活動に生かそうという前向きな気持ちにかえていくことが必要です。連携を続けていくうちに、その必要性や良さが培われていくことが考えられます。
- イ 小・中教員同士が顔見知りになり、子どもたちについて気楽に意見交換できる人間関係をつくることも大切です。垢田中校区では、まず手始めとして、3校の管理職が二月に一回は意見交換をする会をもっています。
- ウ 小学校と中学校の行事や時程等の違いから連携の時間を生み出すことも課題です。まず、互いのことを良く理解し合うことが出発点です。
- エ 教頭の異動は、通常3年です。せっかく培ってきた地域との人間関係や知識をいかに次の教頭につないでいくかも大きな課題です。引き継ぎがうまくいかず、0からの出発をくりかえすのこぎり型の引き継ぎにならないようにしなければいけません。そこで、同じ中学校区の教頭同士で地域の情報を連絡し合い、これまでの連携を引き継ぎ合うことが必要です。キーワードは、「学校の教頭から地域の教頭へ」です。

第2分科会「子どもの発達に関する課題」

コミュニティ・スクール等を活用して、児童生徒の豊かな心を育む

周南市立秋月中学校 田邊 克

1 主題設定の理由

周南市の全小中学校は、平成24年度から地域との緊密な連携により、地域とともにある学校を創出するため、コミュニティ・スクールとなりました。そこで、本市教頭会では、これまでの各教科、道徳、特別活動および総合的な学習の時間を通して取り組んできた子どもの発達に関する課題、小学校から中学校へのなめらかな接続を行い、発達段階の特徴に配慮しながら、系統的・持続的な学習指導および生徒指導を推進することについて、学校のみが取組ではなく、このコミュニティ・スクール等を活用した取組を研究することとしました。

2 研究のねらい

これまで各校ごとに、地域との連携に取り組んできましたが、コミュニティ・スクールとなり、各中学校区での地域教育ネットの構築が急務となっています。そこで、小中連携、地域連携を推進して子どもの発達に関する課題解決を目指す中で、コミュニティ・スクール等をどのように活用していくか。全教職員による連携体制で、情報交換・交流・異校種間の協働実践を効果的に推進するための取組と体制づくりについての教頭としての役割を研究することとしました。

3 研究の概要

(1) 研究の流れ

1年目は、先進校の取組を発展させ、各校の取組の長所、短所を明らかにして、地域協育ネットの基盤作りを行い、期待する児童生徒像への効果をまとめました。2年目は、地域協育ネットを活用し、具体的な児童生徒の発達に関わる課題解決についての成果と評価を行いました。

(2) 研究の内容

- ①コミュニティ・スクール等の活用に関する取組についての実態調査
- ②子どもの発達に関する課題解決を図るための具体的な取組や体制づくり、およびそれらへの教頭のかかわりについてのまとめ

(3) 研究実践

①岐陽中学校区

(岐陽中 徳山小 岐山小 遠石小)

「魅力ある学校づくり」をスローガンに、不登校未然防止と児童生徒の将来の社会的自立を目標に掲げて取り組みました。まず、学校の基盤である授業改善において、主体的な学びを生み出すために生徒指導の3機能を生かした授業づくりを行い、小中の全教職員が集まる模擬授業大会などで共通理解を深めました。また、4校のかかわり合いのある体験活動として「自分を見つめて心を磨く無言清掃」や小中共通の生徒指導の手引きの作成と活用によって「履物をそろえる指導」を共同実践しました。また、中学生が小学校の行事に協力したり、中学校あいさつ大使が毎学期、各小学校に出向き、小学生と一緒にあってあいさつの活性化を目的にあいさつ運動を行ったりと、小中連携・小小連携を進めました。

②太華中学校区

(太華中 久米小 櫛浜小)

学校輝きプランを立ち上げ、生徒一人ひとりが、自己有用感をもった輝く生徒になれることを

目指しました。特に生徒指導上の課題解決のために、コミュニティ・スクールを大きな改革へのチャンスと考え「すべてが教育資源」の基本的な考えを打ち出し、地域や保護者などが積極的に学校に関わることで、教育課題の早期の解決を目指して地域・保護者対象の「普通の授業体験」、「学校じゅう美術館プロジェクト」などに取り組みました。

ソフトな見守り活動を促す「普通の授業体験」では、校区の2つの公民館はゆるやかな学校支援地域本部として、地域協育ネットの中核となる位置づけを担っており、企画と保護者参加募集を学校、広報や地域の募集を校区内の2つの公民館と役割分担しています。また、「すべてが教育資源」の考えのもと、山口県立博物館の博学連携事業も多数回利用しました。来校されることの少なかった方々にも、これをきっかけに、広く生徒を見守ってもらうことが可能になりました。

「学校じゅう美術館プロジェクト」では、地域在住の芸術家をアートディレクターにして、PTA役員、教員、生徒で展示準備をし、生徒や地域の方の作品、芸術家による実物を展示、鑑賞する企画展を月一度行い、その中で行われるギャラリートークを通して、生徒の直接的に豊かな心の育成とキャリア教育を芸術面から促そうと試みました。



③秋月中学校区

(秋月中 秋月小)

「夢をもってたくましく生きる子どもの育成」を目標に、9年間を見通した教育を進め、1小1中という地域性を生かして小中連携教育の強化に努め、学校・家庭・地域の三者連携による協働実践を通して子どもの学びや成長を支援することを目指しています。

小中合同の学校運営協議会組織を立ち上げ、小中学校の教員全員が3部会に分かれて取組を検討する小中連携教育専門部会にも運営委員の方に参加していただき、企画の段階から意見交換を行っています。具体的な学校同士の連携（小中連携）としては、夏休み学習会や出前授業での小中教員の交流や、小中合同で行うあいさつ運動、ボランティア清掃、合唱交流会などでの児童生徒の交流、学校評価書の評価項目の共通化による課題解決に向けた共同実践などを行っています。

また、地域と学校の連携として、公民館の夏休み子ども講座や敬老会、夏祭りや幼稚園、小学校行事への中学生のボランティア参加を推進しています。保護者も小中学校で共通なため、学校と家庭の連携にも力を入れ、親子奉仕作業、親子音楽鑑賞会、救急蘇生法講習会、お弁当づくり教室などの活動を行いました。また、年末に小中学校、地区社会福祉協議会と共催で行った門松づくり講座では小中の保護者が共同で竹の切り出しから餅つき、豚汁づくりなどを行いました。このような活動の様子はコミスクだよりを地区の全家庭に配布して紹介するとともに、小中学校それぞれの学校だよりや学校ホームページでも発信しています。

4 成果と今後の課題

各校で学校規模や地域の様子などをふまえ、さまざまな工夫を行い、研究を進めた結果

(1) 地域の教育資源の発掘

(2) 連携の強化

(3) 教職員全体の意識の高揚 等の成果が表れました。今後も学校や地域が協働する具体的な取組を推進するために、運営体制の充実や活動のさらなる周知が必要であり、コーディネーターの充実や個人情報管理、危機管理などの課題の解決に教頭として取り組んでいく必要があります。

第3分科会「教育環境整備に関する課題」

地域とともにある学校づくりの推進と教頭のかかわり

山口市立大内小学校 濱本昌明

1 主題設定の理由

山口市は、小学校が34校、中学校が17校ある。すべての学校が、学校運営協議会を設置したコミュニティ・スクールであり、山口市教育振興基本計画に基づき、学校・家庭・地域の連携を図り、「協働によるまちづくり」に取り組んでいる。その山口市の教育目標は、「やまぐちで育てる 夢をもち 未来を切り拓き 世界にはばたく子ども」であり、その推進戦略を「地域の教育力を結集して子どもを育む」としている。そして、3つの組織「教育支援ネットワークやまぐち路傍塾」「学校運営協議会」「地域協育ネット」を機能、活用させながら目標達成に向けて日々実践している。また、具体的に子どもにつけたい力を、(知力)(体力)(徳力)(コミュニケーション力)の4つとしている。そこで、地域の教育力を発揮させ、地域とともにある学校づくり推進のため、教頭として何ができるか、また、どういったかかわりを持つべきか教育環境整備のソフト面として考察するため、本主題「地域とともにある学校づくりの推進と教頭のかかわり」を設定した。

2 研究のねらい

山口市内各校の現状把握を通して、学校運営協議会のあり方、小中連携の取組、教職員の意識の3つの視点から考察する。

3 研究の内容

- (1) 学校運営協議会の現状とそのあり方について
- (2) 9年間を見通した小中連携の取組について
- (3) コミュニティスクールに対する教職員の意識について

4 研究の概要

- (1) 学校運営協議会の現状とそのあり方

① 内容

- 学校経営 24 ○ 学校評価 24 ○ 地域協育ネット(組織づくり) 14
- 授業参観を通じた児童の姿 8
- 具体的な取組 6(子ども、保護者、地域、学校づくり)
- 小中連携 3 ○ 地域人材、地域教材 2 ○ 網紀保持 2 ○ 学力調査 2

② 協議会の委員数

- 9人以下 4 ○ 10～14人以下 20 ○ 15人以上 5

③ 協議会に参加する教職員数

- 0～2人 8 ○ 3～4人 15 ○ 5～7人 6

④ 年間の実施回数

- 3回 16 ○ 4回 6 ○ 5回 2 ○ 6～7回 5

⑤ 中学校との合同開催の回数

- 0回 13 ○ 1回 13 ○ 2回 1 ○ 3回 2

(2) 9年間を見通した小中連携の取組

① 内容

- 小中合同研修会 17 ○ 出前授業 10
- 小中連絡協議会 (授業公開、協議、情報交換) 8 ○ 小中連携推進会議 7
- 小中合同綱紀保持委員会 3 ○ 地域のボランティア活動 3

(3) コミュニティスクールに対する教職員の意識

※ H26年度中に教職員アンケートを実施する予定である。

① 内容

- 「地域とともにある学校づくり」は、知力・体力・徳力・コミュニケーション力をつけるのに役立っているか。
- 3つの組織「教育支援ネットワークやまぐち路傍塾」「学校運営協議会」「地域協育ネット」を知っているか。活用しているか。大切だと思うか。

5 研究の成果

- (1) 山口市における「コミュニティ・スクール及び地域協育ネット」の取組を全教頭が理解することができ、この取組に対する認識が高まった。
- (2) 学校運営協議会のもち方、あり方についての方向性を示すことができた。

6 今後の課題

- (1) 学校運営協議会や地域協育ネットの充実をどう図っていくか。
- (2) より魅力的な小中連携の取組にするためにはどうすべきか。
- (3) コミュニティ・スクールに対する教職員の意識の向上をいかに図るか。

この3つの視点から教頭として何ができるか考察していく。

~~~~~ 《秋季研修大会の写真②》 ~~~~~

「第一部会」



「第四部会」

「第二部会」



「第五部会」

「第三部会」



「第六部会」



### 第3分科会「教育環境整備に関する課題」

豊かな子どもたちの育ちを支えるコミュニティ・スクールづくり  
～地域資源の重層的な活用による学校教育の展開～

下関市立川中中学校 末 永 勝 明  
下関市立長成中学校 赤 道 久 嘉

#### 1 主題設定の理由

文部科学省は平成28年度までに全国の公立小中学校におけるコミュニティ・スクール指定校を3000校に拡大することを目標にしている。そのような中、県内でも多くの公立小中学校がコミュニティ・スクールの指定校となってきた。しかし、中にはコミュニティ・スクールとしてのスタートは切ったものの、その取組においては未だに手探りの状態で進めている学校も少なくない。地域の特性や学校の実態を反映したコミュニティ・スクールをいかに効率よく作り上げていくかを明らかにしようとするこの主題を設定した。

#### 2 地域・支部の実態

下関地区は、平成24年度末にすべての小中学校がコミュニティ・スクールの指定を受けた。しかし、そこにいたるまでの経緯はさまざま、以前から「学校支援地域本部事業」や「ふるさと下関協育ネット事業」の委託を受けていた学校もあれば、その一方で十分な準備期間もなく、名前だけが先行し、本来のコミュニティ・スクールとしての成果が現れていない学校もある。

#### 3 研究のねらい

子どもは多様な人々と関わる中で、「豊かさ」につながる知恵を育てていく。そのため、学校は地域の特性を見抜き、さまざまな人的資源を学校の実情に沿った形で、どのように取り組んでいくのか大きな役割をもつ。下関市内は山間部から都市部にいたるまで、多岐にわたる教育環境を抱える地域である。それぞれの地域の特性に合った地域資源活用のあり方を研究し、学校教育につなげ、豊かな子どもたちの育ちに生かしたい。

#### 4 研究の内容

##### (1) 学校運営協議会の立ち上げ・再編

学校運営協議会で実際に話し合われる具体的な議題としては、「補充学習の支援について」「通学路の安全整備について」「PTAとの連携について」「いじめ防止対策について」「地域行事への子どもの参加について」などがあげられる。どの学校においても、学校運営協議会の委員には、自治会長をはじめとして地域の諸団体の代表者が多く見られるが、以前PTA会長や副会長を務めていた方や小学校のPTAの役員、事務長や事務主任などが入ることでうまく機能している学校も見られた。人材の発掘と確保や、若い地域人材を取り入れる工夫も必要であり、学校運営協議会に加わってもらうとよい人、よい団体は、学校の教育活動を洗い出し、どのような活動に、どのように関わってもらうのかを明らかにすることで分かってくると考えられる。

##### (2) 推進母体の組織化

コミュニティ・スクールとしてうまく機能するためには、学校、学校運営協議会、学校応援団、コーディネーターがうまくつながるとともに、その推進役が必要である。コミュニティ・スクールの立ち上げ時期にはほとんどの学校で、学校が推進役となり、その中心の多くは教頭である。

##### ①学校運営協議会立ち上げ時の工夫（山の田中学校）

中学校区内にある2つの小学校とともに「中学校区学校運営協議会」を組織し、そのメンバーでそれぞれの学校の運営協議会を結成。その「中学校区学校運営協議会」が、そのまま「地域協育ネット協議会」となった。さらに、3つの学校からの委員が「こどもの学び部会」「心の教育部会」「地域連携部会」の3つの部会に分かれた。これにより、当初から小中連携、小小連携、地域連携が生まれ、活動もスムーズに行うことができた。



## ②地域に根ざした組織づくり（長府地区）

平成20年度に学校支援地域本部「ほっちゃんや」、加えて「長府中おたすけ隊」という、保護者やもと保護者を中心とした有志の会も新たに立ち上がり、学校と学校応援団、学校と地域の連携体制がうまく構築されている。また、コーディネーターが学校と地域の状況を把握し、効果的な取組が行えるようサポートしている。

## (3) 地域・保護者・教職員間の協力体制づくり

### ①情報発信

コミュニティ・スクールそのものに対する理解を深めてもらうための情報発信や、互いに協力関係ができるための情報発信を積極的に行っていくことが大切である。

- 学校運営協議会が発行するコミュニティ・スクールだより（名陵中学校）

### ②熟議

現在、下関市では、ほとんどの学校で熟議が開催され、それぞれの立場の参加者が地域の課題を共有し、その解決に向けて協働して取り組む機運が生まれ、協力体制が築かれている。

- 中学校区約100名参加の熟議の開催 「リアル熟議 in 勝山」(勝山地区)

### ③教職員と地域のつながり

分掌主任を学校運営協議会のメンバーに入れる、学校運営協議会の部会に教職員の代表を入れる、校務分掌にコミュニティ・スクール担当を位置づける、教職員に学校運営協議会の様子を実際に見てもらう機会を設定するなどの工夫をし、教職員全員がコミュニティ・スクールとして学校がどのように動き、地域からどのような支援を受け、そのことによってどれだけ学校が助けられているかを知る必要がある。

- 地域住民を対象とした、教員が講師の公開講座 「生涯学習講座」(長府中学校)
- 道徳の授業を地域住民が体験 「夜間中学」(川中中学校)

## (4) 小中連携への取組

### ①学校同士のつながり

- 幼小中の協力、読み聞かせ(内日中学校区)
- 生徒による学習・運動支援
- 小学生の中学校授業体験

### ②地域を巻き込んだつながり

- 校区名勝探訪 「名陵校区 魅力・再発見！ウォーク」(名陵中学校区)
- 防災教育 「ハザードマップ作成」(向洋中学校区)



## 5 教頭の役割

- (1) 学校運営協議会を学校のバックボーンとして、子どもたちのために最大限活用する
- (2) 生徒や教職員のがんばりを学校運営協議会を通じて、地域や保護者にアピールする

## 6 成果と課題

成果としては、以下のことがあげられる。

- (1) 教職員のコミュニティ・スクールへの参画意識や地域連携に対する意識が高まりつつある
- (2) 学校へ目を向ける地域の方々が増え始め、「地域全体で子どもを育てる」という意識が高まりつつある
- (3) 生徒も地域の方々との距離感が近くなってきている

課題としては、以下のことがあげられる。

- (1) 教職員のさらなる意識改革
- (2) 学校運営協議会や学校応援団の組織の整備と充実
- (3) 小中連携
- (4) 学校の地域貢献



#### 第4分科会「組織・運営に関する課題」

教員の授業力向上により学校組織を活性化させるための教頭の役割

～ 学力向上推進リーダーの取組を通して ～

熊毛郡田布施町立城南小学校 白石 智孝

熊毛郡上関町立上関小学校 米村 和子

##### 1 主題設定の理由

平成25年6月に閣議決定された第2期教育振興基本計画に基づき、本県でも平成25年度から本県教育がめざす方向性と施策等を示した新たな指針となる教育振興基本計画が策定された。

この教育振興基本計画を推進していくための3つの柱（①「知・徳・体の調和のとれた教育の推進」②「質の高い教育環境づくりの推進」③「生涯にわたる県民総参加の教育の推進」）において、子ども達の基礎・基本の徹底を図り、確かな学力を身につけさせること、教職員の資質能力を向上させること、家庭の教育力の向上を図るとともに家庭・地域と学校とが連携した取組を充実させること等が指標として示されている。

熊毛郡教頭会では、これら県の施策の方針を受け、各校の特色や職員年齢分布状況などを鑑みただ、『個々の教員のキャリアステージに応じた資質能力を伸ばしながら個々の授業力を向上させることで、子どもは確かな学力を身につけ、学校の組織力は向上するであろう。また 家庭や地域の協力を得て、連携を強化することでさらに活力のある学校運営ができるようになるであろう』と考え、それを牽引していく教頭の役割について研究していくことを目標に、上記の研究主題を設定した。

##### 2 地域・支部の実態

熊毛郡は、平生町：人口約12,700人（小学校2校、中学校1校）、上関町：人口約3,300人（小学校2校、中学校1校）、田布施町：人口約15,900人（小学校5校、中学校1校）の三町からなり、地理的な隔たりや、町それぞれの取組、学校の特色等はあるものの、郡教育研究会や郡校長会・郡教頭会などでの結びつきは強いといえる。

郡内各校の規模内訳は、中規模校7校（小学校5校・中学校2校）小規模校4校（小学校3校・中学校1校）極小規模校（小学校1校）である。

教員の年代構成をキャリアステージ別に見ると、若手25%中堅18%ベテラン57%となっており、熊毛郡内においても人材育成が急務であることがわかる。

また、県全体では、地域内の学校を継続的に訪問し、授業提供や授業改善への指導・助言を専門的に行う「学力向上推進リーダー（教頭籍）・学力向上推進教員」を配置し、教員の授業力向上を支援するとともに、児童生徒の学力向上を支援している。熊毛郡内においても、田布施町内の小学校に配置された学力向上推進リーダーと学力向上推進教員が郡内各校を訪問し、授業力向上に向けて支援をしている。

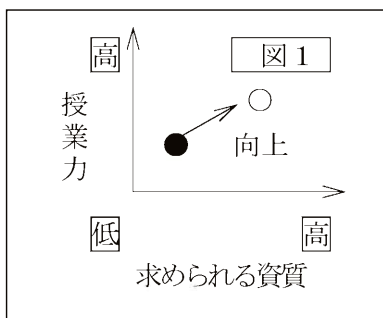
##### 3 研究のねらい

学力向上推進リーダーの取組と連携しながら、教員のキャリアステージ別に、教頭としてどのように指導・支援していくことが効果的であるかを探っていく。

学力向上推進リーダーや学力向上推進教員は郡内各学校を定期的に訪問している事から、各校の取組の良さや、効果的な方策などの情報を共通理解するための中心的な存在として位置づけることができると考えている。

##### 4 研究の内容

(1) 自己目標シートをもとにした面談で、教員個々の役割や目標を明確にする。

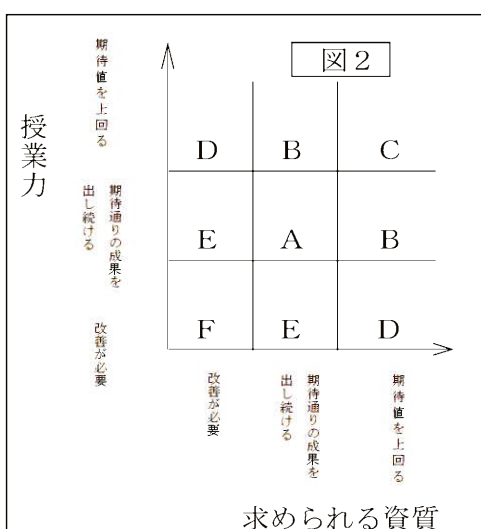


左の図1は、個人の資質向上を図示したものである。

縦軸を教師の第一の仕事である「授業力」と捉え、横軸を「求められる資質」具体的には「外部志向」「明確で分かりやすい思考」「想像力と勇気」「包容力」「専門性」「リーダー性」と捉えてみた。これらを明確を数値で表すことは難しいが、授業力の向上と、求められる資質の向上が相互にあってはじめて、教師のスキルアップができるという考え方である。

周りを巻き込むことで、自分の、そして全体の仕事の幅を広げ、内容を深めていく事がリーダーとしての資質であると考えている。

左の図2は「授業力」と「求められる資質」のそれぞれについて、【改善が必要】【期待通りの成果



を出し続ける】【期待値を上回る】に区分し、組織内のどの位置にいるか、何を努力目標とするかを明確にする為のものである。

A・・・組織の大半を占める。組織の屋台骨となる人達

B・・・優秀な人たち。スキルアップへの課題が明確

C・・・次へステージへステップアップする人

D・・・優秀であるが、大きな課題をもっている

E・・・そのステージに上がったばかりの人

F・・・屋台骨を支えている人材だが課題をもっている。

自己目標シート作成にあたり、教頭は教員とともに、役割と目標を明確にしていくことを支援する。

面談では「今、取り組むべきこと」「スキルアップに

必要なこと」を教員とともに探り、目標を明確にし、それに必要な支援をする。全員が学校運営に参画することで組織全体の活性化を実現することができると思う。

(2) 学力向上推進リーダーは各教員の役割と期待される能力の向上を意識し、授業力の向上を図る。

各校教頭は、それぞれの学校組織の中にある教員のキャリアステージと、目指す方向、つけるべき力について学力向上推進リーダーに伝え、学力向上推進リーダーは、主に各教員の授業力の向上（授業力の向上）を念頭に置いた支援を継続的に行う。

また、学力向上推進リーダーと各校教頭は、教員の現状について意見交換をし、教員へ常に適切な指導助言ができるようにする。

(3) 「授業力」「求められる資質」の評価について、基準と精度を高め、水準化を図る。

前述したように、「授業力」と「求められる資質」は評価の基準が曖昧であり、それを補うためにも個々の教員と自己目標シートをもとにしてしっかり話し合うのであるが、学校によって評価基準に大きく差異が生じることは避けなければならない。そのため、郡教頭会での話し合いや現状報告、学力向上推進リーダーや学力向上推進教員の情報提供・共通理解が重要となる。

## 5 成果と今後の課題

「授業力」と「求められる資質」という資質能力の定義は、耳慣れないものであり、なかなか教員全体に浸透しているとは言えない。繰り返し、説明し理解を得ることが課題である。学力向上推進リーダーと各校教頭の連携についても、未だ道半ばであり、さらなる研究と実践が必要である。

#### 第4分科会「組織・運営に関する課題」

大量退職・大量採用を見据えた人材育成における教頭の役割

長門市立深川小学校 金 嶋 敦 浩  
長門市立仙崎小学校 福 井 章 夫

##### 1 課題設定の理由

本市においても、ここ数年で教職員の大量退職・大量採用が具現化します。学校における教職員の年齢構成が大幅に変化していき、若手の割合が増える学校現場での組織力を向上させていくためには、それぞれのキャリアステージに見合った研修の充実と、それぞれが期待される責務や自己の有用性を自覚できるようにする必要がありますと考えました。

そのために、学校の中で教頭はどのような役割を担ったり、どのような研修を進めていったりする必要があるので、その課題を明らかにすることが教頭に求められる喫緊の課題であると考えます。

##### 2 地域・支部の実態

長門市は人口約 36,000 人、北長門海岸国定公園に指定される美しい日本海の風景が広がります。

小学校 11 校、中学校 6 校で構成され、教職員定数は小学校 137 名、中学校92名です。小学校においては複式学級をもつ小規模校が4校、中学校においても生徒数 50 名未満の学校が 1 校あります。

教職員の年代構成で見ると、30代・40代の教職員が約5割を占めると共に、今後10年間で退職を迎える50代の教職員が4割強を占め、キャリアステージに応じた人材育成が急務となっています。

##### 3 研究のねらい

研究1年次に実施した「長門市教職員アンケート調査」をもとに、「教員一人ひとりが、今以上に教師力を高めていくためにどうするか」「教職に対する情熱やモチベーションを、いかに高め維持していくか」の2点が学校の組織力をこれまで以上に高めていく視点であると考え、人材育成の面から教頭がどのように働きかけていくことが有効であるか、研究・実践・検証を行ってきました。その際に、研究1年次に設定した、研究仮説【各ステージごとの教員への教頭としての関わり】についても実践をとおして検証を重ね、教頭のよりよいかかわりの姿を明らかにしていきます。

##### 4 研究の内容

- (1) 上記ねらいの2点を踏まえた「若手人材育成の強化・加速1,000日プラン」の各校での実践的取組を行い、その具体を示すとともに、有効的な方法や働きかけを明らかにしていきます。
- (2) 研究仮説【各ステージごとの教員への教頭としての関わり】について、実践をもとに検証し、成果と課題についてまとめ提言します。
- (3) 授業力の向上に教頭としてどのようにアシストするか考えます。
- (4) 10年先、さらにその10年先を見据えた人材育成の方向性をまとめ、教頭の教職員へのよりよい関わり方について仮説を立てることとします。

##### 5 研究の実際

- (1) A小学校の取組～1000日プランミーティング（座談会的面談）より～
  - ・1年次教員（毎月1回）、2年次教員（ふた月に1回）、3年次教員（学期に1回）実施します。
  - ・ミーティングは放課後の30分限定で実施します。（途中で30分で必ず切るようにします）
  - ・「研修ビジョンと研修計画」（A小学校の校長が4月に作成したもの）の項目ごとに自己評価ができ

るように教頭が作成した【1000日プランシート】に、あらかじめ該当教員が自己評価をしてミーティングに参加します。出席者は、管理職、教務主任、各部長、該当学年主任、新採担当等です。

・一番大切なのは、自己評価を元に、成果や課題を本人にしっかりと語らせること。これまでは指導され、話を一方的に聴くことが多かった若手に、「自分の言葉」で語らせることが、より本人の自覚や課題解決に向けての具体に繋がるようです。教頭の役割はミーティングの設定と出席者の連絡調整 ミーティングの進行ですが、いかに成果や課題を引き出ようにするかがポイントになります。



教頭がファシリテーターで進行

また、温かい場の雰囲気づくりに配慮します。

(2) 各ステージごとの教員への教頭としての関わり 成果と課題より～

・フレッシュ期（新規採用～5年）

学級経営や学習指導を重視する傾向にあることから、そのノウハウを学校内で伝えていく仕組みづくりができれば、若手のうちから力が育つのではないだろうか？

(成果) 学級経営や学習指導に関する具体的指導 →意欲的な実践、授業力向上に繋がった。

(課題) 先を見通す大局的な見方、計画的な業務遂行能力、優先順位の付け方の習得など。

・ミドル期（6年～15年）

「より専門性や指導力を伸ばしたい」というニーズに応え、力を発揮してもらうため、校内研修等において中核に据えたり、ミドルでチームを組ませ全校に提案させたりする場を確保することで、専門性を高めることに繋がるのではないだろうか？

(成果) 「任される」ことが意欲を高めた。専門性の向上。先を見通す目が育った。

(課題) 新たな発想を引き出す能力。忙しい中の体調管理。若手を育てる目を養うことなど。

・ベテラン期（16年～）

各人のこれまでのキャリアや専門性を十分に認め、それを発揮し活躍できる場を保証することでモチベーションを高めていくことに繋がるのではないだろうか？

(成果) プロジェクトリーダーとして人を動かす動きにシフトした。リーダーシップが発揮された。

(課題) 組織としてより、個人の感覚・判断になりがち。新たなやり方を取り入れる柔軟性など。



やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、ほめてやらねば、人は動かず。(フレッシュ期)

話し合い、耳を傾け、承認し、任せてやらねば、人は育たず。(ミドル期)

やっている、姿を感謝で見守って、信頼せねば、人は実らず。(ベテラン期)

山本五十六氏～『人を動かす』からの一考察

(3) 授業力の向上についての教頭としてのアシスト

- ・長門市みずび学園を基盤とした、小小・小中連携における授業交流を活性化しました。
- ・学力向上推進リーダーによる訪問指導や自主研修「ながと授業作りセミナー」等において長門市教育委員会と連携を図りながら、積極的な研修参加が可能となるように助言や指導にあたりました。
- ・長門市「わかる・できる授業作り」の校内の推進役として、モデルを元に指導助言をしています。

(4) 10年先、さらにその10年先を見据えた人材育成の方向性～教頭として今考えること

- ・若手にも全校的な視野を持たせるために…「何をするか」という発想から「何のためにするか」という発想へ転換させることが大切であると考えます。
- ・さらに、若手には社会人として身につけてほしい力を校内体制で育てていく必要があります。
- ・ミドルには本人の適正を見抜いた上で、専門性を発揮できる環境を与えていきたいと思います。
- ・ベテランの教育技術を継承するシステムを構築していきたいと考えます。



## 第5分科会「教職員の専門性に関する課題」

平成26年度全国公立学校教頭会研究大会復伝

防府市立華西中学校 中村博尚

### 1 全国大会第5分科会に参加して

大会は3日間の日程で、全国から約2200名の会員の参加があった。

初日は、開会行事の後、全国公立学校教頭会小川研究部長から基調提案と全体シンポジウムがあった。大会主題「豊かな人間性と創造性を育む学校教育」を受けて、「絆を大切に生涯にわたって自立・協働・創造していく子どもの育成」をテーマに研究部から視点が示された。コーディネーターの基調提案をもとに、3名のシンポジストの提案があり、会場の質問を取り入れながら行なわれた。秋田県の学力観、地域性を改め



て理解するとともに、学校教育の優れている点を改めて見つめ直すことができた。特に、特別活動の領域で、子どもたちが学習したことが社会生活の中で大きな価値を生んでいることを再認識できた。また、「学校の先生はもっと自信をもっていい」という強いメッセージをいただいた。

大会2日目は、市内8会場で分科会が行われた。以下、第5B分科会について復伝する。

大会3日目は、「いま教育に必要なもの」という演題で、読売新聞特別編集委員の橋本氏の講演がありました。恩師や母親から受けた薫陶（くんとう）をもとに、「人間形成には、家庭での教育が核となる。悪い行いをしたときは、最も身近な人間である親が批判者にならなければならない」など、大切な言葉をいただきました。教育者として、また人として生きるヒントを大切にしたい橋本氏の言葉に励ましを感じる時間となった。

#### (1) 教職員の資質・能力の向上を図るための教頭の役割

～地域や学校の特色を活かして～

提言者 福井県美浜町美浜南小学校 内田 雅文

美浜町では人権教育とエネルギー環境教育の推進を教育の柱として取り組んでいる。

学力向上、規範意識の高揚等、多くのことが教員に求められ、日々の多忙感もぬぐえない中で、いかに教職員の資質・能力を向上させ、ベテラン教員の指導技術を継承していくかが課題となっている。このような背景から各学校の特色を活かし、教頭のかかわり方の工夫を模索する中で、教職員の資質・能力の向上を図っている。

研究内容としては、校内研究体制の充実として、次の2点に重点を置いている。

- ① 教職大学院との協働研究
- ② ワークショップ型授業研修の推進

また、教職員評価の活用にも特色がみられ、以下の観点で教職員の資質・能力の向上に教職員評価を活用している。

- ・スクールプランと整合性のとれた教職員個々の目標設定（学校経営参画意識の醸成）
- ・教職員個々に応じた支援計画の設定
- ・教職員相互の学び合い・協働の成立を促す指導・助言

美浜町における教育活動の両輪ともいえる人権教育とエネルギー環境教育は町内全教職員が取り組んでおり、教頭が積極的にその推進に努めることにより、教職員の資質・能力の向上につなげている。

## (2) 教職員の専門性をはぐくみ、資質の向上を図るための教頭の役割

～意識や意欲、力量を高めるために～

提言者 秋田市立下北手中学校 伊藤 裕

教育の専門家としての意識や意欲、力量を高めるために、教職員の年齢層に応じた専門性や資質の実態を明らかにし、組織を生かした研修や人事評価など、日頃の実践での教職員に対する指導・助言・支援を通して、教頭としての役割やかかわり方について研究がなされている。研究の視点については、教職員の専門性を、教育活動に際し、子どもの状態や発達段階を考慮しながら、それにふさわしい指導ができる力量ととらえ、次の4つに焦点化している。



- ①児童生徒理解力
- ②集団指導力
- ③学習指導力
- ④学年・学級経営能力

また、研究の実際については、

### ア 授業参観の充実

人事評価や校内研修として実施する授業参観を実りのあるものにするために、校長や研究主任等と連携し、推進のためのコーディネート役を担った。授業に対する管理職の指導助言のあり方を工夫したり、参観者相互のアドバイスシートを活用したりするなどして、教職員の授業に対する意欲や資質の向上を図っている。

### イ 小規模校の相互連携

近隣の小規模3中学校間で、教頭が連絡調整をし、各校の学校訪問指導に、自校の専門教科の教員を参加させる取組を実施した。教頭としては、次のようにかかわり、連携を推進している。

- ① 自校教員の参加の調整
- ② 自校の校内体制の調整
- ③ 訪問校、市教委との連絡調整
- ④ 反省のまとめと次年度取組の検討

### ウ 全市的な規模での授業研修会の実施

全市一斉授業研究会と称して、秋田市小・中学校の全教員の参加を基本として、教科等の授業者の所属する学校を会場に、授業研修会を実施している。全市一斉授業研究会において、各校の教頭は、研究会の役員として、授業構成をはじめとする指導案の検討や授業提示に対する指導助言など、市教委の指導主事とともに、授業研究の中心的な役割を担っている。

## 第5分科会「教職員の専門性に関する課題」

教職員の小中連携についての意識高揚と専門性の向上に向けた取組と体制づくり（2年次）  
～中学校区を単位とした小中連携教育の推進を通して～

周南市立遠石小学校 上田 俊宏

### 1 主題設定の理由

小学校から中学校へのなめらかな接続を行い、発達段階の特徴に配慮しながら、系統的・持続的な学習指導及び生徒指導を推進するためには、広い視野に立って教育活動の改善充実を図っていくことが重要である。周南市では、児童生徒の学びや育ちの促進をめざし、昨年度から中学校区を単位とした小中連携教育に対して組織的に取り組んでいる。

本市教頭会では、各中学校区の実態や特性に応じた目標達成に向けた取組を展開し、P D C Aサイクルで取組を改善していくことができる小中連携教育を推進することが重要であると考えた。そして、そのためには教職員の意識高揚と専門性を高めることが必要不可欠であると考えた。

### 2 地域・支部の実態

周南市では、平成24年度から市内全小中学校でコミュニティ・スクールに取り組んでいる。また、各小中学校に小中連携担当者を配置するとともに、中学校区ごとに連携推進会議及び担当者連絡協議会の学校間の組織を作り、中学校区の実態・特性等に合わせた部会制の校内組織を作っている。教職員間の情報交換や交流等も進み、中学校区単位の地域協育ネットにも取り組み始めているが、教職員の主体的な取組が推進されるよう意識の高揚を図る必要がある。

### 3 研究のねらい

教頭として、小中連携やコミュニティ・スクール、地域協育ネットにおける情報交換・交流・異校種間の共同実践を全教職員で組織的、効果的に推進するための取組と体制づくりについて研究する。特に、推進を図るための「課題の共有化」「目標の焦点化」「取組の具体化」についての工夫に視点を当て、教職員の意識高揚と専門性の向上に向けた教頭の役割を研究の中心とする。

### 4 研究の内容

- (1) 各中学校区における小中連携、コミュニティ・スクール、地域協育ネットに係る取組及び体制について現状調査の実施
- (2) 小中連携教育の推進を図るための具体的取組、体制づくり及びそれらへの教頭のかかわりについてのまとめ

### 5 研究の概要〔2年次〕

#### (1) 周南市の現状

- ・学習指導部会、生徒指導部会、環境部会等の組織を作って取り組んでいる中学校区は約半数
- ・各小中学校に連携担当者をおき、全中学校区において、小中連携推進会議を実施

#### (2) 周南市の小中連携による具体的取組

<交流の例>

- ・小中合同研修会
- ・小中教員相互の授業参観
- ・中学校教員の小学校への出前授業
- ・地域清掃、避難訓練等の小中合同行事
- ・6年生による中学校の授業参観
- ・中学生による小学校での職場体験
- ・あいさつ運動
- ・サマースクールへの教員の派遣
- ・運動会、文化祭への参加
- ・小中合同授業の実施
- ・熟議の開催

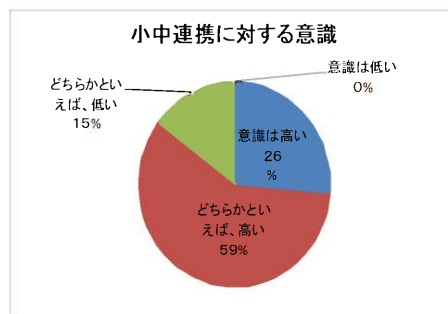


<共同実践の例>

- ・学習規律の共通化（返事、聞く姿勢、礼 等）
- ・生活ルールの実践（挨拶、無言清掃 等）
- ・「家庭学習の手引き」の作成
- ・「学習の手引き」の作成
- ・「生活の手引き」「夏休みの心得」の作成
- ・チャレンジ目標、学校評価項目の共通化

(3) 教職員の小中連携に関する意識

小中連携の具体的な取組を通して、中1ギャップへの対応や9年間の子どもの育ちを見通した指導等において連携の必要性や重要性への意識は高まってきているが、従来行われている生徒指導連絡会等の取組で十分という意識や小6・中1の担任や教務主任、生徒指導主任が行うものという意識など、参画意識に差もある。



(4) 小中連携教育に係る教頭の役割

- ・小中連携教育の要として、教頭同士の打ち合わせや情報交換
- ・担当者と連携して会議や行事、合同研修会等の企画、連絡、調整
- ・教職員の意識高揚に向けた指導助言、日々の教育活動における小中連携の視点による指導助言

(5) 小中連携教育による成果

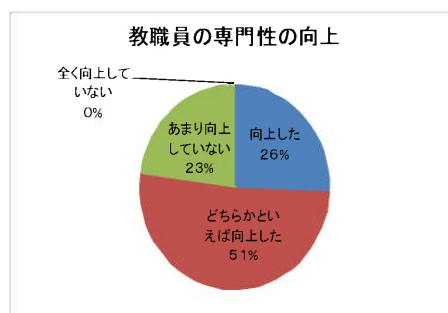
「中学校区における状況や課題が理解できた」「顔なじみになり、話しやすい相手が増えた」「互いの学校の様子分かるようになった」「授業交流により、児童生徒の情報を共有できるようになった」「協力体制が生まれてきた」「地域で子どもを育てていこうという気運が盛り上がってきた」などの成果があり、小中連携教育を行うことが、学校にとって大変有効であることが分かった。

(6) 小中連携における課題

小中連携教育を進めていく必要はあるものの、会議の時間や準備等による忙しさの増加、授業参観をするゆとりの少なさ（特に小学校の学級担任）、複数中学校と連携することから派生する共同実践の内容調整、行事等の日程調整の難しさなど、解決すべき様々な課題がある。

(7) 教職員の専門性の向上に関する成果

小中の学習内容のつながりを意識した指導、子どもの発達段階に応じた指導の工夫、中学校教員の専門的な指導に触れることによる指導方法の深まり、9年間の長期的な視野に立った生徒指導など、指導方法や児童生徒の発達、生徒指導等に関する教職員の専門性が向上していることが分かってきた。



(8) 教職員の専門性の向上に関する課題

小中連携教育を進めることにより、教職員の専門性が高まることは十分に理解できているものの、合同研修会や情報交換会を実施する時間の確保が難しいこと、授業研究会や行事等の見学に校種を超えて参加するための日程調整が難しいこと、年1回の合同研修会では専門性の向上は難しいこと、専門性向上に対する意識の高揚など、まだまだ課題は多い。

6 成果と今後の課題

- コミュニティ・スクールによる地域との連携が進むにつれて小中連携もさらに進み、各小中学校における校内体制もできている。
- 「課題の共有化」「目標の焦点化」「取組の具体化」についても、中学校区単位で進められており、教頭を中心に、教職員がかかわりながら取り組み、各校それぞれ成果を上げている。
- 小中連携の体制が整い、コミュニティ・スクールや地域協育ネットへの取組が進んでいく中で、教職員の意識高揚に向けた教頭の積極的な働きかけが必要である。



## 第6分科会「教頭の職務に関する課題」

コミュニティ・スクール推進における教頭の役割  
～連携・協働を重視した学校づくりに向けて～

光市立上島田小学校 松田和彦  
光市立東荷小学校 久保田智子

### 1 主題設定の理由

光市では、「ふるさと光市を愛し、夢と希望と誇りをもった子どもの育成」と、「魅力ある学校」「創意ある学校」「信頼される学校」の学校像をめざして、生きる力を育む学校教育を推進している。

また、本市では県内先駆的な取組として二学期制を平成18年度から開始し、学校教育の改善に努めてきたが、平成25年度からは市内全中学校で、そして今年度からは全ての小学校でコミュニティ・スクールの指定を行い、施策をとおして学校運営の改善に取り組んでいるところである。

このような中、各校においてはPTAの事務局として、またコミュニティ・スクールの事務局として一段と教頭の業務の重要性が増している。そこで、本市教頭研修会では「コミュニティ・スクールの推進における教頭の役割」を研究主題において、資質向上に努め学校運営の改善に向けての研修に取り組んでいる。

### 2 地域・支部の実態

光支部は、公立小学校11校、公立中学校5校であるが、市域の学校と郊外・山間部の学校があり、その立地条件はさまざまで、地域性も異なっている。従って各校がコミュニティ・スクールとして地域や異校種間で連携・協働する際にも課題は一様ではない。

### 3 研究のねらい

地域の実態に即したコミュニティ・スクールをどのように推進すればよいか、また教頭としてどのように関与すればよいかの考察を行う。

### 4 研究の内容

- (1) 各校の推進状況の把握
- (2) 幼・保・小・中の連携を密にし、15歳までを見通した具体的な取組の仕組み方
- (3) 学校・家庭・地域がめざす子ども像を共有し、教育の当事者として子どもの学びと育ちに積極的に関わるための導き方
- (4) 教頭間のネットワークを活用して成果や課題、情報を共有し、市内各校で連携を強化する方途の検討

### 5 研究の実際 ～各中学校区での取組～

- (1) 光井中学校区（1小1中）
  - ・ 光井小・光井中は互いの入り口が20mしか離れていない地の利をいかし、小中のコミュニティ・スクールの組織を同じにし、学校運営協議会を合同で実施している。
  - ・ 例えば、光井地区での小中共通の育てたい児童・生徒像に迫るために、学校・家庭・地域が連携・協働できそうな取組を語り合う熟議を行い、意識を高めた。組織としては、学習支援・地域交流・広報の3部会がめざす児童・生徒像に向けて活発に活動をしている。
- (2) 浅江中学校区（1小1中）
  - ・ 浅江小では、校章・校歌にも使われているニジガハマギクの育成を地域と協働で行い、地域と

学校が絆を深めながら郷土愛を育てていく活動を行っている。

- ・ 浅江中は平成21年度に文科省の研究指定を受け、市内で最初にコミュニティ・スクールをスタートした。「あさなえネット」の名称の下、地域・保護者・学校が連携し企画・運営している活動が多数ある。成果は、生徒の学力や自尊感情の高さにも反映している。

(3) 島田中学校区（4小1中）

- ・ 各小学校で、地域の組織や地域コーディネーターと連携した活動を模索しながら実践を始めている。周防小では、市の野外活動施設を活用した4泊5日の通学合宿を実施することで、児童同士はもちろん、地域・保護者・学校の絆が強くなったことを実感した。
- ・ 島田中は浅江中に次いで市内で2番目にコミュニティ・スクールの研究指定を受け、「地域を愛し、地域に愛される学校作り」を目指し実践を重ねてきた。4つの小学校から生徒が入学してくる島田中にとって、特に小学校との連携が重要課題で、教職員の授業交流、生徒による小学校訪問など様々な連携活動を行っている。

(4) 室積中学校区（1小1中）

- ・ 1小1中のよさを生かし、コミュニティ・スクールの準備段階から育てたい子ども像の共通理解を図るため「室積っ子大好き作戦」のポスターを作成し、地域各戸への配布、主要公的機関・商店での掲示を行った。コミュニティ・スクールのマークも共通のものにした。
- ・ 地区の運動会やクリーン作戦に児童生徒が積極的に参加したり、中学生が小学校に学習指導の手伝いに行ったりするなど、地域へのかかわりや学校間連携を大切にしている。

(5) 大和中学校区（4小1中）

- ・ 3年前に文部科学省の研究指定を受け、以降小小連携や小中連携を活発に進めている。小小連携では、高学年の宿泊学習や修学旅行を合同で行ったり、低・中学年では交流学习を行ったりしている。小中連携では、大和中の生徒や教員が小学校に出向き学習支援を行ったり、中学生の職場体験を小学校が受け入れたりしている。また、小中ふれあい交流会を実施している。
- ・ 塩田小・東荷小は、地域との合同運動会を実施することで地域とのつながりを強めてきた。

**6 教頭の役割と今後の課題** ～各中学校区での取組を考察して～

- ・ 学校評価の自己評価を学校運営協議会に示し関係者評価を得る。
- ・ 地域人材活用のために、地域コーディネーターと連携する。
- ・ 公民館などの関係機関と円滑に連携する。
- ・ 教職員に対して、これまでの教育活動をコミュニティ・スクールの視点で見直していくよう促す。
- ・ 校務分掌と学校運営協議会の部会をリンクさせ、熟議の体制を作る。
- ・ 各教員の資質向上のため、関係機関と主体的に関わる仕組みをつくる。

以上が、教頭の役割であり、これらを円滑に進めることが教頭の課題ともなってくる。教頭会の組織を活用して、学校間の情報連携の下、コミュニティ・スクールの推進に取り組んでいきたい。

**7 全国大会復伝**

- ・ 豊かな人間性と創造性をはぐくむ学校をめざして  
～学校組織の活性化と教頭のあり方～（北海道渡島公立学校教頭会）
- ・ 学校運営の活性化を図るための副校長としてのかかわり  
～職員への意図的な働きかけを通して～（岩手県宮古地区副校長会）
- ・ 学校組織・運営の活性化を図るための教頭のかかわり  
～全職員が参画できる学校評価のあり方～（秋田県大曲仙北教頭会）

それぞれの提言を基に、組織の活性化を図るための教頭の役割に焦点をあてた具体的な取組について各グループで協議が行われた。

## 第6分科会「教頭の職務に関する課題」

### 学校評価における教頭の職務

～学校評価システムの改善と学校評価結果の分析による学校運営の改善～

萩市立田万川中学校 中川真治

#### 1 主題設定の理由

現在、各学校では学校評価による学校運営の改善が行われている。文部科学省も実効性の高い学校評価の推進について提言しており、その重要性は増すばかりである。

萩・阿武中学校教頭会では、学校評価における教頭の職務について研究を進め、各学校の教育力を高めるとともに、「学校評価システムの改善」と「評価結果の分析に基づく学校運営の改善」の2つの柱による取組を「実効性」のある学校評価につなげたいと考え、本主題を設定した。

#### 2 地域・支部の実態

萩・阿武支部は、小学校23校、中学校17校で構成されている。萩市・阿武町それぞれ人口減少の影響で、児童生徒数は減少し続けており、萩市中心部の以外の学校は、小規模校や島嶼部校であり、小中併設校も増加している。このような実態の中、萩市では「ふるさと萩市を誇りとし、志を抱き生きる力をもった子どもの育成」を目標にコアスクール構想による特色ある学校づくりを進めている。また阿武町では「ふるさと愛を基盤とした夢と智慧を育む学校教育の推進」を目標として、ふるさと教育による地域ぐるみの学校教育を展開している。

#### 3 研究のねらい

学校評価における教頭の職務について調査・研究することで、実効性のある学校評価により各学校の教育力を高め学校運営の改善につなげる。

#### 4 研究の内容

研究1年次は、まず学校評価における教頭の職務について実態調査を行い、課題の洗い出しを行った。そして「学校評価システムの改善への取組」、「学校評価の結果分析に基づく学校運営の改善への取組」を副主題に掲げ、研究を進めた。

##### (1) 学校評価システムの改善への取組

- ① 文部科学省「学校評価等実施状況調査」をベースにした8項目についてアンケートを実施し、全国平均と比較することで、萩・阿武支部の学校評価の現状と課題について把握した。

##### (調査結果から明らかになった課題)

- 学校評価、特に目標設定における教職員の関わりが少ない。
- 教職員個々の目標設定との関連づけが進んでいない。
- 多忙感の解消や学校評価者間の意識の浸透が不十分である。
- 的確な評価や指摘が導き出せない。

- ② これらの課題をふまえ、全校体制で行う学校評価システムの構築、学校関係者評価の充実を目指し、各校で学校評価の改善に着手した。(事例紹介4校)

- 5つの校務分掌チームによる学校評価システムの構築
- 3つの課題別プロジェクトチームによる学校評価システムの構築
- 学校事務職員の参画促進による学校評価システム
- 学校関係者評価の工夫と充実

(各学校の取組を通して得られた成果と課題)



|    |                                                                                                                                                                                         |
|----|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 成果 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・教職員の学校の課題、目標への認識、当事者意識の高まりが見られた。</li> <li>・学校評価に管理・事務部門の視点が導入された。</li> <li>・情報提供が活性化した。</li> <li>・学校関係者の主体性、評価の的確性が向上した。</li> </ul>             |
| 課題 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・教職員の「自己評価スキル」を高める必要がある。</li> <li>・9年間を見通した評価の実現（小・中相互評価）が必要である。</li> <li>・教職員の負担軽減への配慮と工夫が必要である。</li> <li>・学校関係者評価の評価項目の吟味と整理が必要である。</li> </ul> |

## (2) 学校評価の結果分析に基づく学校運営の改善への取組

- ① 研究1年次は「学校評価の結果分析」を中心に研究を進めた。まず、各学校の平成24年度の学校評価書をもとに情報交換を行い、各校の学校評価結果の分析から学校運営改善に向けた3つの重点課題、「学力向上」「小中連携」「地域連携」を明らかにした。
- ② 研究2年次は、上記3つの重点課題をもとにして各校で学校運営改善に取り組んだ。

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 学力向上 <ul style="list-style-type: none"> <li>・学力向上プランの見直し<br/>（PDCAサイクルをもとにした検証サイクルの確立）</li> <li>・授業改善<br/>（学習のめあての明確化、授業形態の工夫、指導案の工夫等）</li> <li>・家庭学習の習慣化</li> </ul> </li> <li>○ 小中連携 <ul style="list-style-type: none"> <li>・学力向上の視点での連携の具体化<br/>（小中教員による長期休業中の自主学習会の開催、小学校教員による中1生徒の指導）</li> <li>・小中一貫教育にむけた取組の強化<br/>（9年間を見通した共通指導事項の共通理解・実践）</li> </ul> </li> <li>○ 地域連携 <ul style="list-style-type: none"> <li>・コミュニティ・スクールの発展</li> <li>・学校支援ボランティアの効果的活用</li> <li>・地域協育ネットへの取組</li> <li>・キャリア教育の視点に立脚した地域との連携行事の見直し</li> </ul> </li> </ul> |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

## 4 教頭の役割と今後の課題

各学校の学校評価における重点課題への取組には、校長が掲げる学校ビジョン共有の下、各学校の課題を明確にし、その課題の改善に向け、全教職員、保護者、地域が協働した取組が必要となる。その取組を進めていくためには、教頭を中心としたマネジメントが大変重要なポイントとなる。

そのマネジメントを考えると、キーワードとなるのは「つなぐ」である。教頭は学校内外を様々に「つなぐ」役割を果たしている。まず教職員で目標や課題を共有し、学校運営の改善を図っていくため、学校内をつなぐ役割を果たしている。また、学校と家庭・地域が協働して現状把握、課題共有、目標達成、成果の把握・改善を行えるよう窓口となって学校と家庭・地域をつないでいる。さらには小・中共通の評価項目を設定するなど、9年間のつながりの中で学校と学校をつないでいる。

このような教頭の「つなぐ」役割は新たなつながりを生み、学校の総合力を向上させる大きな力となっている。

今後も継続して学校評価における教頭のマネジメントの有り様について研究を重ね、各校の学校運営改善に向けた教育力を向上させていきたい。



## 第1分科会 「教育課程に関する課題」

### 1 研究主題

- 1年次（小学校） — 学力向上を図るための特色ある教育課程の工夫 —  
2年次（中学校） — 教師・生徒の学びへの「意欲」を育むための方策と教頭の役割 —  
～ 「岩国プラン」に基づいた授業改善を通して ～

### 2 研究協議

#### (1) 協議題

- ① 学力向上に向けた教育課程の工夫と教頭としての関わり方
- ② 教員の学力向上に向けて、教頭としてどのように取り組んでいるか。その具体的方策について協議したい。

#### (2) グループ協議

- ・ 教員の授業力アップについては、教頭が率先垂範して授業研究を行うことが大切である。教員のモチベーションを維持させることが教頭の役割である。
- ・ 小中学校の9年間を見通した（系統立てた）教育課程を構築する必要がある。
- ・ 小中連携は大切である。その際、小中学校が互いを知り、互いの願いをくみ取って連携をする必要がある。小中学校合同の研究授業は有効である。また、小小連携も大切である。
- ・ 小中連携と同様に地域連携も大切である。個々の活動について地域と目標の共有化を図り、何のために行っているのか、指導内容は良かったかなど評価をすることが大切である。
- ・ 学習ボランティアを招いたり、出前授業を取り入れたりすることが教員の意識改革につながり、また、互いの授業を観る機会を多く設けることが授業改善になる。
- ・ 近くの大学と連携し、学生を学習ボランティアとして活用する方法がある。
- ・ 学力向上推進リーダーややまぐち学習支援プログラム等を十分に活用することが大切である。
- ・ 確かな学力を保障するために、モジュールを活用したり、スキルタイムを設けたり、理解の遅い児童生徒の取出し等を行っている。これらの時間を生み出すため、行事の見直しは不可欠である。

### 3 受指導内容

#### (1) 山口県教育庁義務教育課指導班 主査 濱崎 美幸 様

- 国の情報をいち早くキャッチし教員に伝え、これからの学力を知らせてほしい。
- 地域連携は校長と教頭だけでは駄目である。学級担任と地域が直接話し合うことが大切である。
- これからは若い管理職が増える。管理職同士のつながりをしっかり持ってほしい。

#### (2) 山口市立二島中学校 校長 古田 茂樹 様

- 教育課程とは教育システムである。公教育である以上このシステムを守って上で教育を行わなければならない。学ばなければならないものは皆同じように教えなければならないが、隠れた部分にも学ばなくてはならないものがあるのではないかと思う。（例：秋田県大会復伝の「総合的な学習の時間と学力との相関関係」）
- 中学校の出口を小学校の保護者が知るために、中学校の教員が話をする機会を設けることが大切である。
- 異校種間連携は難しいが、その壁を崩すのは教頭の役割である。

## 第2分科会「子どもの発達に関する課題」

### 1 研究主題

- 1年次（小学校） 「小中連携（コミュニティ・スクールを取り込みながら）で、子どもの発達を促す～小中、地域、家庭をつなぐ教頭の役割～」
- 2年次（中学校） 「コミュニティ・スクール等を活用して児童生徒の豊かな心を育む」

### 2 研究協議

#### (1) 協議題

- ① 小中、そして地域や家庭との連携を深め子どものより良い発達を促すために、教頭としてどのように取り組めばよいか。
- ② コミュニティ・スクールの取組の充実に向けて教頭としてどのように取り組めばよいか。

#### (2) グループ協議

##### ① 協議題①について

- ・ 小中の合同研修会を実施するなどして、教職員同士のつながりをつくることが重要である。
- ・ 小中で「教職員が考えたもの」と「児童生徒が考えたもの」の両面からの共通の取組があるとよい。
- ・ 情報発信と情報収集を行い、学校経営方針と地域の思いを調整することが必要である。（共通の課題を見付け、学校が子どもと地域をつないでいくという視点）

##### ② 協議題②について

- ・ コミュニティ・スクールに関する教職員の意識向上を行うとともに、校務分掌に担当を位置づけることも効果的である。（コミュニティ・スクールに関する研修会の実施も効果的）
- ・ コーディネーターの人選が重要である。（PTAのOB活用 等）
- ・ 教頭が学校のニーズと地域のニーズをすり合わせを行うことが必要である。

### 3 受指導内容

#### (1) 周南市立周陽小学校 校長 岡崎 智利 様

- 教頭の取組が子どもの発達にどのような影響を及ぼすかを明確にすることが必要である。
- 重視すべき課題を明確にし、課題解決のために何をするかを考えることが大切である。
- 学校と家庭・地域が互恵性のある温かいつながりのあるシステムを構築し、「教育の協働化」を図っていくことが必要である。
- 管理職として「関係力」「専門性」「人間性」を向上させていくことが、学校と地域をつないでいくことにもつながる。

#### (2) 山口県教育庁義務教育課指導班 主査 河本 政之 様

- コミュニティ・スクールには学校支援、学校運営、地域貢献の3つの機能がある。
  - 学校支援…・ 学校、家庭、地域が目指す子ども像を共有し、各学校及び各地域の実情に応じた実践を行っていくことが重要である。
  - 学校運営…・ 様々な意見が出し合える受容的な場づくりを行い、地域ぐるみの学校づくりを起こっていくことが重要である。
  - 地域貢献…・ 地域とともに歩む人材を育成することが重要である。
- 子どものより良い発達を促すためには、教職員だけでなく地域の人も含めたより多くの大人の目（フィルター）を子どもに向けることが必要である。
- 成果が見えないと次の課題に臨めない。成果を明確にしていくことが必要である。

### 第3分科会「教育環境整備に関する課題」

#### 1 研究主題

- 1年次（小学校） 地域とともにある学校づくりの推進と教頭のかかわり  
2年次（中学校） 豊かな子どもの育ちを支えるコミュニティ・スクールづくり  
～地域資源の重層的な活用による学校教育の展開～

#### 2 研究協議

##### (1) 協議題

- ① 学校運営協議会のもち方、あり方について。 ② 学校と地域がウィンウィンの関係になるためには。

##### (2) グループ協議

- ・地域の実情に合わせた組織づくり、長く続けていくためのシステムづくりが重要である。
- ・運営協議会の下に、実働可能な部会を設けることで活性化を図ることができる。
- ・拡大括弧運営協議会等、小中連携の運営協議会を開催することも必要である。
- ・中学校区をひとつとした、幼稚園保育園も巻き込んだコミュニティ・スクールを目指す。
- ・学校運営協議会委員や、キーパーソンとなる地域コーディネーターが重要であるが、適任者の人選が難しい。
- ・地域との連携によるメリットが感じられるような場を設定することで、教職員の意識の変容をはかる。
- ・熟議を導入し、地域や保護者への啓発の機会をもつとよい。
- ・地域と学校ができることから始め、負担にならないよう実践することが、ウィンウィンの関係づくりにつながる。
- ・教職員の意識改革や学校運営協議会の活性化を図るとともに、学校と地域が互いにどのように貢献し合えるかをリサーチし、地域と学校のウィンウィン関係をつくっていくことが、教頭としての重要な役割である。

#### 3 受指導内容

##### (1) 下関市立小月小学校 校長 大木 昇 様

- コミュニティ・スクールは、校長が学校経営ビジョンを発信する場である。教頭は相談役として、校長と一緒に学校運営に尽力してほしい。
- 山口支部が示した「3つの視点」はどれも大切である。研修会やアンケートなどを通して、市内の全教頭が共通理解できたことは大切である。課題解明に向けた、来年度の実践の発表が楽しみである。
- 下関支部は先進的な取り組みをしている。実践を市内の教頭が共有することで、市全体のレベルも向上しており、成果を上げている。実践の分析から見えてきた「4つの課題」は、しっかり取り組んできたことのあらわれである。
- 山口・下関ともに全市でコミュニティ・スクールを指定している。実践していくうちに少しずつ見えてくるメリットにしっかり目を向けて推進していくことが大切である。
- 学校運営協議会の充実のため、地域を知り、実効性のある組織づくりをすることが教頭としての大切な役割である。
- 連携から融合へレベルアップすることで、ウィンウィン関係を構築することが必要である。

##### (2) 山口県教育庁義務教育課地域支援・人事班 主査 守山 敏晴 様

- 山口県では、4年前より組織力の強化に取り組んでいる。県内の学校の82%がコミュニティ・スクールであり、全国平均の8%を大きく上回っている。今後も取り組みの充実を図っていきたい。
- 社会総がかりで地域教育力の向上を推進し、子育てのしやすい山口県を目指すというのが知事の方針である。
- 県教委は「学力向上」「人材育成」「地域連携」を重点としており、コミュニティ・スクールの果たす役割は大きい。
- 学校に多くの保護者や地域の方に来てもらい、学校を学びの場とするために、学校を開く中で、コミュニティ・スクールの3つの機能である、「学校支援」「学校運営」「地域貢献」の充実を図ってほしい。

## 第4分科会「組織・運営に関する課題」

### 1 研究主題

- 1年次（小学校） 教員の授業力向上により学校組織を活性化させるための教頭の役割  
～学力向上推進リーダーの取組を通して～
- 2年次（小学校） 大量退職・大量採用を見据えた人材育成における教頭の役割

### 2 研究協議

#### (1) 協議題

- ①各校の「授業力を高める」ための手だて・工夫について
- ②各校の人材育成における教育の実践的取組・工夫について

#### (2) グループ協議

##### ①協議題①について

- (ア) 研修主任を中心に1人1授業を実施する。コメントを出し合う。板書を写真に撮り研修主任が指導する。若手の自主研修を企画する。校内のベテランの先生に得意分野の指導をお願いする。などの手法が有効である。
- (イ) 学力向上推進リーダーを中心にした研修の中で、板書型指導案作成して研修を進める。

##### ②協議題②について

- (ウ) 仕事を任せ自信をつけさせる。計画的に人材育成をすすめる。ベテラン、若手、中堅を混ぜて話し合わせる。校務分掌で若手とベテランを組ませるなどの方法が有効である。
- (エ) 先生の良さを生かした校務分掌や次期主任を育成するためのプロジェクトチームの活用も有効である。

### 3 受指導内容

#### (1) 山口県教育庁 教職員課学校管理班 主査 世木 尚 様

- 校長の示したビジョンを教職員が共有していくことが大切である。
- 具体策を立案する際には、ミドルリーダーが中心となって行う方法が有効である。
- キャリアステージに応じたかわり方を行うとともに、組織として人材を育成したい。
- 小中の連携や地域とともにある学校づくりを行うための連携には、熟議が必要であり、子どもを中心に据えた取組を行うことが重要である。
- 教職員の満足度の向上をめざした取組や面談を通してやる気を促進する価値付けが教職員評価では大切である。

#### (2) 美祿市立大嶺中学校 校長 松本 孝志 様

- 9ブロックによる評価は興味深い。授業力だけでなく、資質がついているかを調べる評価であるので、先生の成長力を調べるものとなっている。求められる資質はこれよりか等を改善し、より良い研究にしてほしい。
- 学力向上推進リーダーの活用においては、授業力とは何か（学級集団を創る力、生徒を理解する力、教材解釈の力など）をはっきりさせて研究を進める必要がある。
- 1000日プランの有効な活用方法に、組織的に取り組んでいることがすばらしい。キャリアステージに即した対応は、参考になるものである。
- 教育委員会と連携した取組は、教職員への周知が大切な視点である。
- 人材育成の基本は、ティーチング（指導）とコーチング（考えさせる）のバランスである。
- 学校は、子どもを育てるため、学校のビジョンを達成するためにある。



## 第5分科会「教職員の専門性に関する課題」

### 1 提言発表

#### (1) 1年次(中学校) 平成26年度全国公立学校教頭会研究大会復伝

##### ① 教職員の資質・能力の向上を図るための教頭の役割(福井県美浜町美浜南小学校)

美浜町では人権教育とエネルギー環境教育の推進を教育の柱として取り組んでいる。教頭は推進役として、教員への支援、指導・助言などはたらしめかけにより、教員の資質・能力の向上を担うとともに、同時に教頭としての資質・能力の向上も担っている。

学力向上、規範意識の高揚等、多くのことが教員に求められる中で、いかに教職員の資質・能力を向上させ、ベテラン教員の指導技術を継承していくかが課題となっている。

##### ② 教職員の専門性をはぐくみ、資質の向上を図るための教頭の役割(秋田市立下北手中学校)

教育の専門家としての意識や意欲、力量を高めるために、教職員の年齢層に応じた専門性や資質の実態を明らかにし、組織を生かした研修や人事評価など、日頃の実践での教職員に対する指導・助言・支援を通して、教頭としての役割やかかわり方について研究がなされている。

研究の視点については、教職員の専門性を、教育活動に際し、子どもの状態や発達段階を考慮しながら、それにふさわしい指導ができる力量ととらえ、児童生徒理解力、集団指導力、学習指導力、学年・学級経営能力、使命感の醸成、意欲・モラルの向上に焦点化している。

#### (2) 2年次(小学校) 教職員の小中連携についての意識高揚と専門性の向上に向けた取組と体制づくり～中学校区を単位とした小中連携教育の推進を通して～

教頭として、小中連携やコミュニティ・スクール、地域協育ネットにおける情報交換・交流・異校種間の共同実践を全教職員で組織的、効果的に推進するための取組と体制づくりについて研究する。特に、推進を図るための「課題の共有化」「目標の焦点化」「取組の具体化」についての工夫に視点を当て、教職員の意識高揚と専門性の向上に向けた教頭の役割を研究の中心とする。

成果と今後の課題については、①市内の小中学校が、コミュニティ・スクールに取り組み始めて、3年目になる。コミュニティ・スクールによる地域との連携が進むにつれて小中連携もさらに進み、各小中学校における校内体制もできている。②「課題の共有化」「目標の焦点化」「取組の具体化」についても、中学校区単位で進められており、教頭を中心に、教職員がかかわりながら取り組み、各校それぞれ成果を上げている。③小中連携の体制が整い、コミュニティ・スクールや地域協育ネットへの取組が進んでいく中で、教職員の意識高揚に向けた教頭の積極的な働きかけが必要である。以上3点があげられた。

### 2 グループ協議

各中学校区小中連携教育の推進に係る具体的な取組、体制づくり及び教頭としてのかかわりについて、活発なグループ協議が行われた。テーマを絞った小中合同研修会、価値的目標の共有、学校規模や地域の実情に応じた体制づくりの必要性などについて意見が出された。連絡調整役・指導助言者としての教頭のマネジメント力を一層高めていく必要がある。指導助言では、麻郷小学校田村校長から、研究・研修を進めるにあたっては、教頭の役割が半分程度必要であり、これが教頭の資質向上につながる。また、課題共有、目標の焦点化、取組、評価をPDCAサイクルとして、教頭としての動きを明確化したまとめ方により、チーム会議で検討していく必要性を示唆していただいた。また、山口県教育庁義務教育課の和田主査から、小中連携においては15歳の春をイメージして子どもに接すること、また、コミュニティ・スクールの大きな柱は、小学校にとっては学校支援、中学校にとっては地域貢献であることを示唆していただいた。

## 第6分科会「教頭の職務に関する課題」

### 1 研究主題

- 1年次（光支部） コミュニティ・スクールの推進における教頭の役割  
～連携・協働を重視した学校づくりに向けて～
- 2年次（萩・阿武支部） 学校評価における教頭の職務  
～学校評価システムの改善と学校評価結果の分析による学校運営の改善～

### 2 研究協議

#### (1) 協議題

- ① 各校のCS推進状況、および教頭の役割における成果と課題
- ② 組織的な学校運営改善に取り組むための教頭のマネジメントはどうあるべきか

#### (2) グループ協議

##### ① 協議題①について

- ・ CS推進のキーワードは” 連携 ” である。育てたい子どもの姿や、課題についての話し合いをしっかりとる必要がある。
- ・ 学校と地域が双方向の関係にならないといけない。Win-winの関係をつくることが大切である。
- ・ 教頭は、コーディネーターとして学校と地域をつないでいく役割を果たす。

##### ② 協議題②について

- ・ 学校評価への教職員の参画意識を高めるためには、負担感を達成感に変えていくことが重要である。プロジェクト方式が有効である。熟議や評価に於いて、全教職員を巻き込んでいくとよい。
- ・ 評価を生かして、改善していくことが大切である。

### 3 受指導内容

#### (1) 光市立室積中学校 校長 永光 進 様

- 光市の取り組みの特徴①指定までの準備期間があり、教職員の心の準備や見通しがある程度できたこと。②地域の人みんなで子どもを育てようという意識があること。これが、根幹の部分である。③子どもたちの郷土愛を育てること。これが、地域の活性化につながる。④小中連携の視点をもっていること。
- 今後の進め方①教頭としての研究ということを意識すること。教頭として、どのように働きかけたか、課題は何か。②研究の過程で、現状を把握し、問題点はないかを考える。仮説を立て、研究することが必要である。教頭としてどう関わり、どういう成果が出たのか。③はずしてはならない大切な視点は、校長をどのように補佐するかということである。“補佐” は校長が教頭に期待するところである。④軌道に乗ったときに気になるところである。人事異動があっても、安定した取組が継続して行われることが大切である。
- 学校と地域がwin-winの関係になること。自分の地域にあったCSにすること。児童生徒にとってどうなのかという視点が大切である。

#### (2) 山口県教育庁義務教育課地域支援・人事班 主査 宇野 孝一 様

- 新しいスタイルの学校が求められている。今は、変革の時期である。学校の課題を地域に開くことが大切だ。
- 評価することが、目的化していないだろうか。改善に生かすという意識が薄いと思う。結果が出てからが大事なのに、グラフ化して、まとめて終わりになってはいないだろうか。
- 教頭の役割は、” つなぐ ” こと。教職員にとっては、負担感が達成感になるようにする。学校関係者にとっては、よりよい学校づくりの動きが見えてきたと実感できることが大切である。
- 教頭が、自分の言葉で語ること。それが、人材育成につながる。校長と教頭がタッグを組んで取り組んでいる学校は前進している。小さな改善の積み重ねが大きな変革につながる。

## 6 「組織マネジメントセミナー」の概要

### 「組織マネジメントセミナー」の概要

(1) 趣 旨 校長会・教頭会と協働し、組織マネジメントに係る研修を行うことによって、管理職としての学校管理・経営能力の向上を図るとともに、夢のある学校の創造及び学校の活性化をめざし、もって本県教育の充実、振興に資する。

また、広い視野に立ち教養を高めるとともに、今日的な教育課題の解決の方途を探る中で、日常の教育実践に生かすことのできる研修を行うことによって、管理職としての資質や能力の向上をめざす。

(2) 期 日 平成26年8月19日(火)～20日(水) 1泊2日

(3) 会 場 山口県ふれあいパーク

(4) 参加者 山口県公立小・中学校2年次教頭

(5) 主 催 山口県公立学校教頭会

(6) 共 催 山口県教育委員会 (公財)山口県ひとつくり財団

(7) 日程と研修内容、講師等

| 【1日目】平成26年8月19日(火) |         |                                                               |           |
|--------------------|---------|---------------------------------------------------------------|-----------|
| 時 間                | 研修内容等   | 内容・講師等                                                        | 場 所       |
| 9:50～10:30         | 受付      |                                                               | エントランスホール |
| 10:30～11:00        | 開講行事    | (1) 会長挨拶<br>(2) 来賓挨拶<br>・山口県教育委員会<br>(3) 実行委員長挨拶<br>(4) 諸連絡   | 研修室(3F)   |
| 11:00～12:00        | 講義      | 「地域とともにある学校づくりをめざして」<br>山口県教育庁義務教育課<br>地域支援・人事班<br>主査 井上 成人 様 | 研修室(3F)   |
| 12:00～13:30        | 連絡・昼食   |                                                               | レストラン(2F) |
| 13:30～15:00        | 講演      | 「街づくり・人づくり」<br>下関観光コンベンション協会会長<br>カモンエフエム代表取締役<br>富永 洋一 様     | 研修室(3F)   |
| 15:30～17:00        | 講演      | 「教育現場での接遇マナー」<br>フェスティナ・レンテ<br>代表 野関 由味子 様                    | 研修室(3F)   |
| 17:00～18:30        | 入浴・散策   |                                                               |           |
| 18:30～20:30        | 夕食・情報交換 |                                                               | レストラン(2F) |

| 【2日目】平成26年8月20日（水） |         |                                                                                                     |                      |
|--------------------|---------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------|
| 時間                 | 研修内容等   | 内容・講師等                                                                                              | 場所                   |
| 6:00～7:00          | 起床・自由時間 |                                                                                                     |                      |
| 7:00～9:00          | 朝食・荷物整理 |                                                                                                     | レストラン（2F）            |
| 9:00～9:50          | 研究協議    | グループ別協議<br>「各校の取組と課題 課題解決に向けて」                                                                      | 休憩懇話室 他<br>（全11会場）   |
| 10:00～11:30        | 講義・演習   | 「人材育成の切り札『ペップトーク』。<br>言葉が変われば人が育つ。／今、<br>子どもたちが危ない！二つの『そ<br>くいく』」<br>末永整骨院<br>院長 末永 成一 様<br>大田 庸補 様 | 研修室（3F）<br>集団宿泊室（1F） |
| 11:30～12:30        | 連絡・昼食   |                                                                                                     | レストラン（2F）            |
| 12:30～14:00        | 講演      | 「笑って元気 ～豊かさについて考<br>えてみよう～」<br>矢野大和事務所代表<br>おおいた観光特使<br>矢野 大和 様                                     | 研修室（3F）              |
| 14:00～14:30        | 閉講行事    | （1）会長挨拶<br>（2）実行委員長挨拶<br>（3）諸連絡                                                                     | 研修室（3F）              |

#### （8）研修の概要

##### ① 講義「地域とともにある学校づくりをめざして」

講師：山口県教育庁義務教育課 地域支援・人事班 主査 井上 成人 様

概要： 地域とともにある学校のもつべき3つの視点（①学校支援②学校改善③地域貢献）をもとにコミュニティ・スクールを推進していくことについて、指導していただきました。また、県内や全国の先進校の取組例を示しながら、各学校の実態に応じた取組とすることの重要性について指導していただきました。講義の最後には、「メリットは作り出すもの」という言葉について説明していただき、コミュニティ・スクールを推進する上での教頭としての取組の心構えを示していただきました。

##### ② 講演「街づくり・人づくり」

講師：下関観光コンベンション協会会長・カモンエフエム代表取締役 冨永 洋一 様

概要： 下関観光コンベンション協会会長とカモンエフエム代表取締役としての立場で、実際に取り組まれていることについて話をしていただきました。

どちらの立場でも、ビジョンをもち、数値目標を立て、会員や社員とともに一丸となって組織的に取り組まれていました。また、「リーダーの条件」や「カモンエフエムスタッフに日頃から伝えていること」では、管理職として大切にしたい心構えや言葉について指導していただきました。関わっている事柄に情熱をもって積極的に活動されていることに触れられ、教頭としての取組に対してのエネルギーを与えていただきました。

##### ③ 講演「教育現場での接遇マナー」



講師：フェスティナ・レンテ 代表 野間 由味子 様

概要： 中学生からの夢であったアナウンサーをめざされ実現されたことや現在の会社を起こされたことについて、体験を交えて話をさせていただきました。実際の体験をもとに、「言葉の大切さ」について指導していただきました。「相手が分かる言葉を使っているか」「言葉は受け取る側に権利がある」といった問いかけや話は、私達が使っている言葉や言葉の認識を振り返るきっかけとなりました。また、「名刺交換」「座席の設置」のマナーについて、具体物や図を通して、その意味を話されながら、指導していただきました。相手との気持ちのよい関係づくりに役立つことができる内容でした。

④ グループ別協議「各校の取組と課題 課題解決に向けて」

概要： 校種別で同規模の学校で6、7人のグループを編成し、「各校の取組と課題 課題解決に向けて」の情報交換や協議を行いました。課題としては、「学力向上」「生徒指導体制やその取組の充実」「特別支援教育」「コミュニティ・スクールの推進」「人材育成」等がありました。その中から、視点を決めて、協議をすすめました。教頭としての立場での取組について、積極的に情報交換や協議を行うことができ、有意義な時間となりました。

⑤ 講演・演習「人材育成の切り札『ペップトーク』。言葉が変われば人が育つ。／今、子どもたちが危ない！二つの『そくいく』」

講師：末永整骨院 院長 末永 成一 様／大田 庸補 様

概要： 2つのグループに分かれ、2つの会場で同時進行により、40分程度の講演と演習を受けました。

「ペップトーク」では、末永先生の体験を交えて、「やる気を引き出す言葉の力」の話をしていただきました。「ペップトーク」の大まかな流れとして「①状況を受け入れる②とらえかた変換③してほしい変換」を説明され、具体例や反例について分かりやすく話していただきました。また、ペアでの演習を通して、「ペップトーク」の意義や行い方を理解しやすくしていただきました。

「そくいく」では、大田先生が取り組まれている「息育」と「足育」の話と演習をしていただきました。「あいうべ体操」や「ひろのば体操」の演習を経験して、実感しながら、体の調子を整える方法を学ぶことができました。

⑥ 講演「笑って元気 ～豊かさについて考えてみよう～」

講師：矢野大和事務所代表・おおいた観光特使 矢野 大和 様

概要： ユーモアあふれる内容と軽妙な語り口で、笑いの絶えない「口演」をしていただきました。山口県の全ての市町で「口演」されているということで、先生の「口演」により多くの県民が「笑って元気」にさせていただいていることが分かりました。「あなたに会えてよかった。また会いたいです。」をモットーとされている先生の言葉には、相手への感謝や思いやりが感じられました。そこに魅力があり、聞く人に「笑って元気」を与えているのだと感じました。そのような魅力をもつことが教員にも求められていると感じました。

## 組織マネジメントセミナーに参加して

周南市立周陽中学校 森田成寿

例年になく雨の多い夏休みだったが、午前中は晴天で、銭壺山からの瀬戸内海の眺めは最高だった。また、会場の山口県由宇青少年自然の家「ふれあいパーク」も施設が新しく、県内の古い青年の家のイメージをもっていた私は感動のもとに研修をスタートさせることができた。

「組織マネジメントセミナー」というテーマについては、聞いた瞬間からSWOT分析等を想像し、難しい内容ではと不安だったが、実際にはどの内容も2学期からの教頭業務への取組を後押ししてくれる元気の出るものばかりであった。以下に各プログラムの内容と感想を簡単にまとめてみたい。

### 1 「地域とともにある学校づくりをめざして」 義務教育課 主査 井上成人 様

コミュニティ・スクールの推進について、先進校の取組を紹介されながらご示唆をいただいた。地域とともにある学校がもつべき3つの視点は、①学校支援②学校運営協議会③地域貢献である。これからの社会においては、地域の活性化・まちづくりの核は学校となっていくが、コミ・スクがますます成果を上げて拡大していくためには、学校、地域にとってWin-Winの関係になることが欠かせない。



### 2 「街づくり・人づくり」 カモンFM代表取締役 富永洋一 様

FMラジオの社長をしながら下関市観光コンベンション協会の仕事をされ、下関市を観光都市として発展させていくためにさまざまな戦略を立てて取り組まれている。会社のトップとしての人材育成の考え方の根底に「夢の実現」がある。

### 3 「教育現場での接遇マナー」 フェスティナ・レンテ 代表 野間由味子 様

言葉は受け取る側に権利がある。また、クレームを言う人はそう思っている人の4%に過ぎず、残りの96%の人は心の中で思っているだけである。したがって、クレームをピンチとせずチャンスとして捉え、改善していかなくてはならない。

### 4 「各校の取組と課題 課題解決に向けて」 各グループ(6人)で協議

私のグループは各校の学力向上に向けての取組について、具体例を紹介し合いながら協議を深めていった。先生方の真剣な表情が印象的であった。

### 5 「人材育成の切り札『ペップトーク』」 末永整骨院 院長 末永成一 様

ペップトークとは、前向きな背中の一押し言葉である。子どもたちへの声掛けも常にポジティブでなければならない。やる気を引き出す言葉の力に大きく心を動かされた。子どもだけでなく先生方への声掛けも、ペップトークを活用したい。今回の研修で最も心に残った内容となった。

### 6 「笑って元気～豊かさについて考えてみよう～」 おおいた観光特使 矢野大和 様

年間400回以上も「口演」をされているだけあって、90分があつという間に過ぎた。笑いあり涙ありの内容であったが、「基礎基本の徹底あってこそ個性である」、「教師は子どもの成長に大きく関わることができる魅力ある職業である」など、教師にとって心を動かされる内容もきちんと押さえられていた。

今回の研修は、学校現場においてすぐに役立つもの、また、即効性はないかもしれないが教頭として人間力を高めるものがバランスよく組み込まれていた。本来研修というものは、自分が欲してこそ身になるものである。その意味において今回の研修は、夏休み中の業務にゆとりがある時期に、豊かな自然に囲まれた落ち着いた雰囲気の中において、自らが欲してできたということは、本当に身になる研修会であった。2学期以降も教頭の激務は続くが、今回の研修が私のやる気スイッチを押してくれたことは間違いない。教職員の先頭に立って頑張っていき、全教職員にやる気全開を波及させていきたいと考えている。

最後に、今回の研修を主催しご尽力いただいた、山口県教頭会会長の上田良夫様をはじめ、執行部役員、財政的な支援をいただいた山口県ひとづくり財団および8名の実行委員の方々にご心より感謝いたします。ありがとうございました。

## 平成26年度組織マネジメントセミナーに参加して

下関市立勝山小学校 西川 孝文

広島で豪雨により大きな被害がでた8月19日、20日の2日間、2年目の教頭を対象に「広い視野に立ち教養を高めるとともに、管理職としての資質や能力の向上をめざす」ことを目的として組織マネジメントセミナーが開催された。会場となった銭壺山にある由宇青少年自然の家も、曇天から大粒の雨が降り始め、8月とは思えない少し肌寒さすら感じる中での研修となった。2日間、様々な分野の方から話を聞くことができたので、特に印象に残ったことを以下に記す。

### 1 「地域とともにある学校づくりをめざして」

山口県教育庁義務教育課 主査 井上 成人 様

「コミュニティ・スクールの推進を中心として」という副題のもと、地域とともにある学校づくりをしていくことの目的や、効果的な推進方法などについて具体例を挙げながらわかりやすく説明していただいた。



その中でも特に、「学校の中に教員以外の人（利害関係のない斜めの関係の人）が入ってくることで、新しい視点からの改革が可能になる」という言葉が印象に残った。以前から「地域に開かれた学校」ということが言われてはいたが、学校が多様な課題を抱え疲弊感さえ感じる現在、学校を変え活性化していくために、積極的に地域の人材や意見を取り入れていくことの重要性を再認識させられた言葉であった。ただ、地域の人材や意見を学校の中に取り入れることに未だに抵抗感があることも現実である。管理職がそのメリットをしっかりと教職員に伝え、具体的なアクションを起こしていくことが必要であると感じた。

### 2 「街づくり・人づくり」

下関観光コンベンション協会会長 カモンエフエム代表取締役 富永 洋一 様

「街づくり・人づくりは遊びながら、楽しみながら」、「職業＝夢ではない。職業は夢や目標をかなえるための手段である」など言葉の端々から、自分の役割や仕事に対しての情熱やエネルギーを感じることができる講師であり、引き込まれるように話を聞くことができた。

講師はリーダーの条件として、①「感動」する為に行動する、②仕事に対する「誇り」、③ 困難に直面しても決してあきらめない事、④「ハラ」を据えて実践する、⑤先を見るという5つを示された。「自分の仕事に誇りを感じ、ハラを据えて実践している」と自信をもって言えるようになりたい。そのためには、「大変だ。忙しい。」という思いだけでなく、仕事の中に楽しさ（目標の達成に向けた質の高いもの）を見つけ仕事に取り組んでいきたいと感じた。



### 3 「教育現場での接遇マナー」 フェスティナ・レンテ代表 野関 由味子 様

アナウンサーをされていたというだけあって、大変聞き取りやすい美しい日本語を話される講師から、これまであまり学ぶ機会がなかった接遇マナーについての話を聞くことができた。

名刺交換の仕方やクレーム対応の仕方、席順等、すぐに役立つ内容が主であったが、何よりも「誰





が言葉を受け取って、どう感じるか～言葉は受け取る側に権利がある～」、「クレームを実際に言う人は100人のうちの4人。1つのクレームの後ろには96の同じ思いがある」という2つの言葉が特に印象に残った。テクニックとしてのマナーももちろん大切ではあるが、相手を大切に言葉が発すること、批判を真摯に受け止め改善をしていくことは、学校や教員一人一人の思いや取組を理解してもらい、協力者を増やしていくために必要であると感じた。

#### 4 「人材育成の切り札『ペップトーク』。言葉が変われば人が育つ。」

末永整骨院院長 末永 成一 様

以前、スポーツ指導におけるコーチングの視点からペップトークについてのお話を聞く機会があり大変参考になった。今回は教頭という立場から、子どもだけでなく教職員を育てるという視点ももちながら話を聞かせていただいた。

講師はトイレの使い方について、「外にこぼすな」ではなく「きれいにお使いいただきありがとうございます」という貼り紙の方が効果的であるという例を挙げられた。人をやる気にさせるためには、ネガティブな言葉ではなくポジティブな言葉をかけられるようとりえ方を変換していくことが大切ということであったが、それは単なる言葉のテクニックとしてではなく、管理職として常日頃から物事をポジティブにとらえることができるように心掛けていかなければ、真に人を育てる言葉につながらないと感じた。



#### 5 「笑って元気 ～豊かさについて考えてみよう～」

矢野大和事務所代表 おおいた観光特使 矢野 大和 様

12:30～14:00という長丁場であったが、講師の見事な話術によりあっという間に時間が過ぎていった。声のトーン、話すスピード、間のとり方等、笑いをとりつつ、しかし大切なところはきちんと伝えるという話術は、教師という職業、そして教頭という役職にあるものとしてぜひ真似したいものである。

話の内容で特に印象に残ったのは「個性は基礎基本の上に成り立つ。偶然できたものは個性ではない」「必要とされることが豊かに生きること」という言葉である。子どもの自己肯定感の低さが様々な社会的な課題につながっているという指摘がある中で、この考え方はこれからの学校教育に必要なものであるとともに、大量退職時代を迎える組織における人材育成という点でも重要な視点であると感じた。



教育関係以外の様々な職業や役職にある方々の話を聞くことができた今回の研修は、教頭という職を1年間経験したからこそ、自分の経験や課題と照らし合わせながら聞くことができ、より有意義であったのではないかと思います。2日間の中で感じたこと、考えたことを今後の職務に生かしていきたい。

最後になりましたが、多忙な中このような研修会を企画していただいた県教頭会執行部役員、実行委員会委員の方々、そして開催にご協力をいただいた県教育委員会、山口県ひとづくり財団に厚くお礼申し上げます。



## 7 随想

### 「せんせいの社会体験」から学んだこと

岩国市立錦中学校 池田 晃太郎

私が、社会体験をさせていただいた錦町農産加工株式会社では、朝礼で全従業員が、その日の製造する製品の賞味期限を声を出して確認し、ラジオ体操をして一日がスタートしていた。

錦町農産加工株式会社は、もともとこんにやくを扱う店として、明治38年に創業しており、旧錦町では、地場産業として発展してきた。現在は、こんにやくやところてん、くずきりなどの製造販売に加えて、ミネラルウォーターの製造・販売も行っている。

社会体験で印象に残ったのは、商品に対する品質管理の徹底である。朝の朝礼での賞味期限の確認もその一つであるが、徹底した衛生管理と品質に関するチェックが行われていた。サンプルを取り、中身の検査をすることはもちろんだが、中身が問題がなくても、賞味期限の印字がかすれていたりずれていたりしたものは、すぐに返品になってしまう。中身はもちろん包装にいたるまできめ細かくチェックしたものを出荷することが信頼を得ることなのだそうだ。

また、衛生管理においても手洗いや頭髪、服装や履物までマニュアルが決まっており、それらを正しく守ったり、確認をすることが業務の一つであることも教えられた。工場内に入る時には、手洗いをマニュアル通り行い、身につけた服に埃や髪の毛がついていないように、粘着テープのついたローラーでそれらを取り除き入場した。全従業員がこのような高い意識でよりよい製品作りをしていることが、ISO9001（国際規格）やHACCP（製造工程での危害を予想、予防するシステム）を取得することに繋がったとのことであった。

わずかの間ではあったが、このような優秀な会社で、製品作りに参加できたことを誇りに思い、また、生徒にその優れている点を伝え、地域を愛する生徒を育成する糧にしていきたいと思った。

### 深めよう絆！ 大好き柳北！

柳井市立柳北小学校 田村 尚美

子どもを真ん中に、学校、保護者、地域が仲良くなる「柳北文化フェスティバル」が11月15日、盛大に開催されました。学校を核として地域の人々がつながる、まさしく地域コミュニティが活性化していくスタートの日のような感じでした。

昨年度から発足した「柳北地区コミュニティ協議会」とともに、6月から、キャッチフレーズ「深めよう絆！ 大好き柳北！」の決定、プログラム、時間設定、バザー・ゲームの催し、展示物、会場準備等の計画から共に考え、協議を重ねてきました。当日、全校群読「雨ニモマケズ」から始まったオープニング、「いじめ絶対だめ！」の標語表彰式、子どもたちや地域の方によるステージ発表、子どもたちが企画した学習の交流会、飲食や物品の販売バザー、PTA有志によるバンド演奏と全員合唱、コミュニティルームを活用した地域の展示等盛りだくさんの企画がスムーズに進行。その結果、みんなが楽しみ、元気が出る、そしてこれからも子どもと関わっていこうとする地域のパワーを見ることができました。



昨年度完成した新校舎の横に、今年度畑を作り低学年の野菜作りに関わってくださった方も、学校支援ボランティアという地域の方です。その中のお一人が、ある日、子どもから受け取った「お礼の手紙」を読まれた後、私にその喜びを笑顔で伝えてくださいました。その時、眼を潤ませ、流された「1粒の涙」に私はぐっと心を動かされました。まずは、学校を積極的に開放していくことによって、地域の人々が集い、子どもたちとつながり、学び合う場とすることから始めていきたいと思っております。本校に着任して2年目の私自身が、温かい柳北地区の中で育ててもらっていることに、感謝する毎日です。

## 新任地での新しい職

周防大島町立明新小学校 鶴田 隆久

鹿の鳴き声が遠くに聞こえる春の夜。あっという間に時計の針は10時を回る。それでもやらなければいけない仕事が全然終わらない。仕事が多いというより、やり方がさっぱりわからなくて、時間があってもできないのだ。自宅から14.4km離れた前任校には、事務職員がいなかった。当然、多くの事務の仕事は、教頭が担当する。それまで担任を受け持ち、日々子どもの指導に当たっていた自分にとっては、まるで別の職種の仕事であった。市費を使ってどのように備品や消耗品を購入すればよいのかわからず、用紙1枚買うことができない。説明を受けても、テイツウ、フクスケ、レンニユウ等、今まで聞いたこともないような言葉ばかりでさっぱり意味がわからない。また、様々な会計の通帳があり、収入・支出のたびに適切に処理しなければならない。最初の頃は、自分の事務能力のなさにほとんど嫌気がさし、正直「これは自分の仕事なのか」という気持ちもあった。だが2年間やっていると、その仕事のおもしろさややりがいとわかってきた。

事務の仕事は、学校運営に大きく関わるとても重要な仕事である。備品購入にしても、教育的効果や仕事の効率化を考え、学校教育目標や本年度の重点目標も考慮しながら、限られた予算をどう使っていくかを考えて予算執行しなければならない。また、給与・手当・旅費の処理、文書の受付、お客様への接遇等々、事務の仕事は多岐にわたり、教職員の生活や業務をかげで支えている。今まで、どれだけ事務の先生にお世話になり、迷惑をかけてきたかが身にしみてわかった。2年間だったが、事務の仕事に携わることができたことは、私にとって貴重な経験となった。

豊北町内の事務の先生方や毎月定期的に来てくださった下関市共同実施の3名の先生方には、私のしつこい質問にも丁寧に答えていただき、いつも助けていただいた。その恩を忘れず、2年間の経験を生かしながら、教頭として現任校の事務の先生と協働していきたい。

## 名優のご冥福を祈る

平生町立平生中学校 中島 幹晃

俳優の高倉健さんが逝去された。11月10日のことである。私は別段、氏のファンではないのだが、その報を耳にした時、一瞬、体から何かが抜け出ていったような感覚をもった。むしろ、自分の体がそのような反応をしたことが私にとっては驚きであった。

氏のように人に慕われる人、また、人の心の支えになっている人がいる。長嶋茂雄さんもその一人だ。松井秀喜氏が新聞のコラムに、1994年の巨人・中日によるリーグ最終戦の様子を綴っておられた。当時の長嶋監督は選手を集め、「われわれが勝つ」「絶対に勝つ」と繰り返したそうである。また、その様子から、張り詰めた空気を楽しんでいるのが明らかで、勝利を疑っていないのが分かったそうである。魅入られた選手たちはグラウンドに飛び出し中日を倒した。人の魅力には様々な側面があると思うが、その人の努力、求道心、謙虚さ、やさしさ、そして確かな世界を背負ったその人の言葉があるように思う。

今や、ネットの世界は大変な広がりを見せている。そのネット世界の中で今年、抜群の歌唱力でカバー曲を歌い、ヒットをとばした歌手や、斬新な発想とメーク技術で有名人そっくりの顔真似をするタレントが批判されるという現象が起きた。高い技術と裏腹に、彼女らが若者を中心としたネットユーザーに受け入れられなかった原因は何であろうか。その批判は「確かにすごいけれど、あなた自身の魅力は何？」と問いかけているように思える。一方、そのネットの世界で若者に支持されているのが、歌手の小林幸子さんだ。動画サイト等での活動が話題になり、その閲覧回数は百万回を超え、ネットの世界でも存在感を示している。確かな歌唱力、オリジナリティー溢れるパフォーマンス。また、その明るさと礼儀正しきから、若いネットユーザーにも受け入れられているように思う。

人に慕われる人、受け入れられる人、三氏三様の個性ではあるが、魅力的な三氏から学ぶことは多い。

## 「場の力」

周南市立大津島中学校 藤本吉章

「学問」とは、学んでしかる後に問うということだと教わりました。学ぶとは「まねぶ」すなわち「まねをする」ことから始まります。

今から約40年近く前、中学二年生だった自分が在校生として臨んだ卒業式での卒業生代表「答辞」の文頭で、いまでも強く記憶に残っている文章です。当時の自分は、一学年が45人学級×9クラスのマンモス校の中で、部活動の練習で汗を流し、ある教科に興味を持ち取り組み、休日などはしっかり友達と遊び、物事をあまり深く考えることのないごく普通の中学生でした。しかし、この言葉は忘れるどころか教職について自分に対して、課題解決に向け、習得した知識の横断的な活用をめざし、基礎基本の定着に努めるという考えをもたらしてくれました。また、小学3年生の時のアルファベットのTの縦・横の長さを測る授業での、自分の「見ただけでわかるから縦が長い」という生意気な回答に対し、丁寧にコンパスを用いた比較で、担任の先生から確認することの大切さを教えていただいた場面が今でも鮮明に思い出されます。このような、その後の生き方に影響を与えた学校生活での経験はまだあります。同年代の児童生徒、教師からなる学校という集団生活の場の力であったと思います。

さて、本年度の全県共通テーマは「豊かな心を育む教育の推進」であり自分の良さに気づき他者を認め社会性を育むことが求められています。このことは「社会の一員として生きる力を育む」ことであり自分自身が経験した「集団生活の場の力」は育むことに役立つと思います。また、どの時代においても学校教育に求められている普遍的なものです。

今後は一人ひとりの児童生徒の生きる力育成のため、授業や学校行事、地域連携などの目的を明確にし、「場の力」が高まる取組みを教職員一同で進めていくことが自分の課題となっています。

## 下松市立花岡小に赴任して

下松市立花岡小学校 岡田陽子

きつねの嫁入りで有名な下松市立花岡小に赴任し、もうすぐ2年が過ぎようとしています。

地元を出るとき、「下松市は、教育熱心なところです。昔から、下松教育として有名です。しっかり学んでください。」と先輩の先生から言われました。下松市に実際に勤務することで、その言葉の意味を実感しています。

まず、何よりも、先生方が大変熱心です。学習指導に対しても、生徒指導に対しても、一丸となって取り組まれる姿勢に胸打たれました。花岡小では、全ての学年が公開授業をしますが、その授業に向けて、学年部を中心に、教材研究が進められます。研究授業当日まで、指導案について考え、より児童にとって分かる授業となるよう、試行錯誤が続きます。若手の先生方にとっては、先輩の先生方から直接学ぶ貴重な機会となっています。

生徒指導面においても、チームで迅速に動く仕組のすばらしさを感じています。何か起こったとき、校長先生を中心に関係者全てが集まり、事実の確認から今後の対応まで話し合います。また、対応後の児童の様子についても、見守る体勢ができています。これら取組を続けることで、児童にとっても、保護者にとっても、信頼できる学校に近づくことができると思います。

若手の先生方も、学習指導・、生徒指導の両面から、年々力を付けていることが分かります。

下松市で学んだ「熱心に迅速に対応していくこと」を肝に銘じ、今後も、より多くの下松市のすばらしさを見つけていきたいと思っています。

## 「つながりスペース」

光市立浅江中学校 重岡正幸

ボートセリングやキャンプにも最適な白砂青松の海岸線が約2.4kmにも渡って続く虹ヶ浜海岸。植物分類学者、牧野富太郎博士により命名された虹ヶ浜を中心とした瀬戸内海の丘陵に分布している秋を彩る可憐な花エジガハマキク。この虹ヶ浜を有した、瀬戸内海に面した気候穏やかな光市浅江に本校は位置している。

浅江地区では、以前から、公民館を中心とした地域活動が盛んに行われている。現在は、浅江地区連合自治会、浅江地区社会福祉協議会、青少年健全育成市民会議浅江地区会議、浅江公民館をコミュニティ構成組織とする浅江地区コミュニティ協議会が設立され、一体的に浅江地区の活動が推進されている。

そのような中、本校は平成21年度より文部科学省のコミュニティ・スクール研究指定を2年間受け、平成23年度よりコミュニティ・スクールをスタートしている。コミュニティ・スクールとしての地域との連携は、校内コーディネーターを中心として行うが、本校では、様々な学習活動の担当者がその学習の目的にそって地域の方との連携を推進している。生徒達も、「さくらまつり」や「サンドアート」などの地域行事で、いつもお世話をいただく方と出会うと、自然とあいさつをするようになった。昨年度の文化祭では、地域の方のインタビューを盛り込んだビデオ番組の上映やステージ上での共演も学年発表として自然に行われた。これまでは、生徒達が地域に出向いて地域行事に参加し、地域の人や地域を知り、地域を愛する心を育んできた。本年度からは、「つながりスペース」や「あさなえルーム」を新設して、地域の方を学校にお招きし、日常的に地域の方と生徒達がふれあえるように工夫している。

地域の教育力は、生徒達の成長にはかりしれない大きな影響を与える。自然とあいさつが交わせるこのすばらしい関係を一層発展させていきたい。



## 「今日も素敵な 1年生 おはようございます」

防府市立玉祖小学校 藤田拓二

学校の抱える課題が複雑化・多様化する中で、都会で働く教師に、いずれは校長になり学校運営に携わっていききたいという意識が低下し、管理職への希望者が激減していることを聞いたことがあります。都会の若い先生たちは、教師として努力をしキャリアを積み管理職になってもストレスだけが大きくなり割が合わないと考えよう。これは広く一般企業においても若者の傾向として言えるようです。社会全体のライフスタイルが変化し、経験や能力をさらに向上させ組織の中での責任ある立場を担うという意欲が持てない社会になっているのかもしれませんが。その1つの原因として人間関係の希薄さ、学校現場でいうと教職員同志や地域住民、保護者、子どもたちとの信頼関係の希薄さかがあげられるのではないのでしょうか。自分が信頼されている必要とされているという実感が人を育て、やりがいを持たせ次のステップに人を向かわせると思います。

私は教頭として残念に思っていることがあります。それは、1年生から結構間違っって呼ばれることです。「きょうとう」という言葉が言いにくかったり、意味がよくわからなかったりすることで、なかなか覚えられないようです。「校長先生」「東京先生」「きょうちょう先生」などいろいろ呼ばれます。中には呼ぼうと思ったが、教頭という言葉が出てこなくて「・・・ねえ。」ということもあります。学校ギャグで「校長先生絶好調(校長)！」というのがありますが教頭バージョンはありません。そこで、間違っって呼んだ1年生に「今日も元気な教頭先生」と言っていたら、数人の元気の良い1年生が「今日も元気な教頭先生、おはようございます。」と言ってくれるようになりました。私も同じように返します。子どもとの繋がりが深まったようで、朝からとてもうれしくてやる気が出ます。

絶好調の校長・元気な教頭がいる、信頼できる先生がいる、行きたくなる楽しい玉祖小学校、教職員が元気に働くことのできる玉祖小学校をめざして、人との繋がりを大切に、今日もがんばっています。



## 我オモウユエニ我アリ

山口市立阿知須中学校 野村 康次

人によって多少の違いはあるにしても、私も、自分の体がボロになり、親が亡くなる、そんな年齢にいつの間にやらなっていました。

5年前には、脳梗塞にかかってしまいました。自分の意思に体がまったく反応しないという経験は、それまでも骨折だのアキレスけん断裂だのはありましたが、次元が違っており怖さを感じました。

しかし、周囲が助けてくださりまた押し上げてくださって昇任し、海峡の町へ単身赴任をしました。（現在は地元に戻っています。）昇任した時、私よりも重い脳梗塞にかかっていた母は、既に言葉も出なくなっていました。涙を流したそうです。しかし、その母も半年後に亡くなりました。

海峡の町でも、皆さんに支えていただきました。自分一人では、肉体的にも精神的にも、とてもやってはいけなかつたろうと思います。人は、生かされている、そう強く感じました。

現在は、体もかなり機能を取り戻しつつあります。

好きな部活指導にも球打ちまでできるようになりましたし、仕事に研修に走り回っており、明日には本校初の「生涯学習講座」を行います。

残る教員人生はそう長くありませんが、自分のできる最大限の力を出して、支えてくださる方々に恩を返したいと思っています。



## パワーの源、給食！

阿武町立阿武小学校 重富 哲也

この4月から20年ぶりの一人暮らしが始まった。前任校での引き継ぎ業務に追われ、赴任準備もままならない中、自宅の本棚にあった「男の手料理」の本を手に取り赴任地へ向かった。しかし、当然、料理を作る暇も余裕も意欲も無く・・・、電子レンジに頼る毎日を送っている。そんな私の食生活を支えてくれているのが給食である。

本校は平成23年4月の校舎改築を契機に奈古小学校から阿武小学校として生まれ変わった。校舎には地元産の杉や檜がふんだんに使用されており、太陽光発電・床暖房・各教室の冷暖房完備など設備の充実が図られている。そんな素晴らしい校舎横には、同時期に新設された電化厨房機器を備えた給食センターが隣接しており、ここで私の命を繋いでいるとも言える給食が作られている。

本校の給食は、アジの南蛮漬けや酢豚、梅とひじきの炊き込みごはん、冷しゃぶうどんなど、メニューが豊富でとてもおいしい。その中でも特に楽しみなのは、月に一度ある「阿武町ごはんの日」である。この日のメニューは、阿武町内でとれた新鮮な魚や野菜がたっぷり使われたものとなっている。1・2学期には、標高400mの準高冷地の福賀地区で作られた糖度たっぷりの福賀ミネラルすいかや福賀高原梨、阿武町のブランド牛肉「無角和牛」など、市場への流通が少ない貴重な食材も出された。当日は生産者の方が来校され、栽培・飼育方法や苦労話などを聞いた後、一緒に給食を頂いた。これらは、子どもたちに生産者の方々や自然のめぐみへの感謝の心を育てることはもちろん、自然に恵まれた自分たちのふるさとの良さに気づかせる良い機会となっている。

今後も美味しい給食をパワーにして、ふるさと「阿武町」を愛し、誇りに思い、自信をもって語れる児童を育てることができるよう、自分に与えられた職務にしっかりと取り組んでいきたいと思う。

## PERFECT（パーフェクト）をめざして

長門市立深川中学校 金丸 耕治

新任教員1年目、初任者研修会で教員のVSOPの話聞いた。無知な私は、お酒？と思ったのを覚えている。20歳代はVitality（バイタリティー）、生き生きと何事にも挑戦し、30歳代はSpecialty（スペシャリティー）、専門分野に長け、40歳代はOriginality（オリジナリティー）、独創性に輝き、50歳代はPersonality（パーソナリティー）、人間として尊敬される……という意味であるが、聞かれたことがある方も多いと思う。私に指導して下さった指導教官は、PをパーソナリティーではなくPerfect（パーフェクト）完璧であれ！とおっしゃっていた。今でも強く印象に残っている。

4月に長門市立深川中学校に着任した。長門市はまさに新採で着任した土地であり、当時のことが懐かしく思い出された。変わらぬ豊かな自然と温かい人々。本当に嬉しく思った。

7月に社会体験研修ということで湯本温泉の大谷山荘にお世話になった。山荘を研修先に選んだ理由は、一流の接客業に定評があり、それを大きな組織で行っているという点が、学校組織の運用に通ずるものがあると考えたからである。研修は慣れないこともあり大変であったが、得るものは大きかった。従業員の方々のプロ意識の高さと組織として協働することの大切さを感じ取ることができた。客に対する徹底したサービスの実践を全ての従業員が意識し実践している。それは各部署ごと、年齢ごとに組織的にOJTが機能しており、大谷山荘を自分たちが創り出しているという誇りを感じた。

現在、学力向上推進リーダーとして市内の全ての中学校を訪問している。各校での授業を拝見しながら、市内の先生方のプロ意識の高さを感じている。山荘は客に対してだが、教員は生徒の成長のために全力を傾ける。先生方一人ひとりの力を十分に発揮するためにも組織での有効な取組が不可欠である。それを牽引していくのが管理職の役目であろう。

あと1年でPの年代を迎える年齢になったが、無論、パーフェクトになれるとは毛頭考えていない。しかし、パーフェクトをめざし、日々精進していきたいと考えている。

## 1枚の写真から想うこと

宇部市立東岐波中学校 田中 康夫



左の写真は、新任教頭である私が、選んだ本年度のベストショットである。本校は、PTAの広報部の活動もさかんで、学校や自分で撮った写真を合わせると数千枚を優に越える。その中で、私が勝手に選んだナンバーワンである。ちなみに私は高校時代、写真部の部長を務め、コンクールで全国3位になった経験がある。

なぜ、この写真を選んだのか。

①今年の運動会に感動したから ②校長先生が本年度で退職だから ③気を付けの姿勢がよいから

いきなりクイズになってますが、さて、①～③のどれでしょうか。

答えはどれも正解なのだが、特に、校長先生と横に並ぶ生徒の気を付けの姿勢とピンと伸びた指先気に入っている。正直、生徒はいつもこうじゃない。運動会の開会式とあってよく頑張っている。でも校長先生はいつもこうだ。これが本来の教師の姿だと思う。姿勢で示し、常に続けることが大事。

新任教頭の私は、いつも超ベテランの校長先生にとっても助けられ、今がある。いったいどれぐらいの時間、2人で話をしたのだろうか。間違いなく言えることは、妻との会話より数十倍多い。校長先生から習ったことは、私が校長になったときにはきっと実践します。ありがとうございました。

## 単身赴任、4年目！

山陽小野田市立須恵小学校 亀谷 秀雄

理科の教員として21年間、中学校に勤務しているとき、教頭への昇進を校長より伝えられた。しかし、伝えられたのは、小学校の教頭であった。一瞬、「なぜ？」と思ったのだが、大学では教育学部の小学校課程を卒業しており、小学校の免許を持っていたからであった。そのことを思い出し納得をした。しかしながら、教育実習以来、小学校へ勤務するのは初めての経験である。とても不安であった。

小学校での勤務が始まった。まず、自己紹介のときに、子どもたちが小学生であるのに、つい「生徒のみなさん」と言ってしまったことを思い出す。この口癖はしばらく直らなかつた。次に、話す言葉でも、この言葉は通じるだろうかと考え込んでしまうこともあった。さらに、教科担任制の中学校では教員の空き時間があり、職員室には誰かがいる。しかし、小学校は学級担任制なので、授業中は、職員室に誰も教員はいることがなく、安閑とした職員室に中学校との違いを強く感じたことを覚えている。そうした小学校の職場にも、1か月も過ぎないうちに慣れ、学校のことについて周りの方に聞きながら、教頭の仕事に慣れていくことができた。

そして、3年も終わりになる頃、やっと単身赴任が終えられると思っていた。しかし、校長より、「異動の中に名前がなかったぞ。」と聞いたとき、言葉も出なかつたことを思い出す。家族に「もう1年、単身赴任になった。」と伝えることが怖かった。家族に伝えると、誰も驚くこともなく、無言であったことを覚えている。単身赴任、4年目も折り返しが過ぎ、この3年間やってきたことのまとめをする時期を迎えている。この4年間での成果は、明るく元気な子どもたちに毎日接することができたこと、職場の先生方と素晴らしい人間関係が築けたこと、地域の方ともよい関係が築け、気持ちよく仕事ができることである。この成果をこれからもいかしていきたいと思っている。

## 「ふれあいに支えられて」

美祿市立秋吉小学校 杉田 真一

目の前に、大草原が広がっていた。その草原のいたるところに、奇岩と呼ばれる石灰岩の塊が顔をのぞかせていた。なつかしい風景である。幼少の時期に、両親に連れられてきた風景である。「秋芳洞」と呼ばれる洞窟に入った。ここも、かつて見たままの様相をそのまま残してたる。黄金柱にたどり着いた。思いの外、小さく見えた。幼い頃は、もっと、大きく、偉大に見えたのだが…。



20年間過ごした下松教育を離れ、秋吉小学校に着任して以来、一日一日が、目まぐるしく過ぎ去っていった。同じようで、何もかもが違う。その違いに戸惑いながらの日々であった。

秋吉小学校は、本年度、隣接する本郷小学校、下郷小学校と3校が統合された。教頭職として初めての勤務、その上、統合した初年度とあって、何もかもが初めてであった。校長を初め回りの先生方の話している意味が分からず、何をどうすればよいのか、これまでの経験通り行ってよいのか、戸惑い通しであった。そんな時、秋吉台に行った。眺めていると自分が悩んでいることが小さな事だと教えられているようであった。「よし、がんばろう。」という気になった。

月日が過ぎて行くにつれ、学校の様子、地域の様子が分かるようになってきた。コミュニティ・スクールを中心とした学校運営を通し、地域との結びつきの大切さ、温かさが見えるようになってきた。同時に、地域の方々が、いかに地域を大切に思い、地域の子どもたちを慈しんで下さっているかが見えてきた。同時に、先生方や地域の方々の温かさを感じるようになってきた。人とのふれあい、地域とのふれあい、自然とのふれあいが、日々の支えになりつつある。



まだまだ、1年間が過ぎていない。いつ、何を、どうすればよいかははっきりと分からない。これからも、後追いの仕事になるだろう。しかし、「ふれあい」を大切にしながら、精一杯がんばりたい。

## 『朝の打ち合わせ会』について

下関市立彦島中学校 徳 本 正

教頭4年目になりました。生徒指導上問題の多い本校です。毎日、色々なことが発生しています。本校は職員朝の会の前に、現校長の提案による『朝の打ち合わせ会』で1日がスタートします。管理職・学年主任・生徒指導主任・教務主任・事務主任の9人がメンバーで、日程・行事・生徒のこと等を共通理解しています。

この紙面ではこの『朝の打ち合わせ会』のよさをお知らせします。①深まった協議はできませんが、30数名の教職員の約1/3のメンバーが会することで、おおよその方向性を決めることができます。②共通理解することの大切さをメンバーが知ることが、各学年・分掌、しいては教職員全体の共通理解に繋がっています。③メンバーの意見に触れることは、メンバー同士の刺激や意欲の向上、そして人材育成にもかかわっていると思われれます。④教頭としては、問題を抱えている生徒、悩んでいる教員のことが把握でき、対応がスムーズに進みます。

教頭はその司会を務めています。メンバーの意見をまとめたり、限られた時間の中で上手に進行したりすることが難しく苦戦をすることがあります。ですが、上述したような『朝の打ち合わせ会』のよさを思い起こし、メンバーとの人間関係をより良好にして、多くの意見を引き出したい。そして、よりよい『朝の打ち合わせ会』にしたいと日々思っています。



## 8 理事会事務局の報告

事務局長 藤 井 康

11月の秋季研修大会防府大会も、無事終了することができました。また、大会終了時に回収したアンケートにたくさんのご意見・提言をいただき重ねてお礼を申し上げます。事務局として、次年度以降の開催に役立てて参りたいと思います。

平成26年度理事会等の概要を報告いたします。

- 4月 5日 会計監査会
  - 28日 第1回組織マネジメントセミナー打合せ
  - 28日 新旧常任委員会
  - 5月16日 第1回理事会
    - ・平成26年度役員選出について
    - ・活動方針及び事業計画、会計予算について
    - ・研修内容、総会及び春季研修大会
    - ・「学校運営必携」作成について
    - ・組織マネジメントセミナーについて
    - ・全国研究大会（秋田大会）
    - ・中国大会（米子大会）
  - 6月 6日 組織マネジメントセミナー実行委員会
  - 13日 山口県公立学校教頭回総会及び春季研修大会（長門市）
  - 24日 回学校運営必携作成委員会
  - 7月 8日 第2回理事会
    - ・各部の活動について
    - ・要望について
    - ・総会、春季研修大会の反省
    - ・秋季研修大会について
    - ・組織マネジメントセミナー
    - ・全国大会、中国大会について
  - 25日 組織マネジメントセミナー実行委員会
  - 30日 全国公立学校教頭会研究大会（秋田市 ～8月1日）
  - 8月 4日 教育研究団体連絡協議会（教育会館）
  - 19・20日 組織マネジメントセミナー（山口県ふれああいパーク）
  - 29日 学校運営必携作成委員会
  - 9月 5日 第3回理事会
    - ・各部の活動について
    - ・秋季研修大会（防府大会）について
    - ・来年度の事業計画について
  - 10月20日 秋季研修大会提言者・司会者・運営委員・会場責任者・地元、県役員打合せ
  - 31日 中国地区教頭会研究大会（米子大会）
  - 11月28日 県公立学校教頭会秋季研修大会（防府市）
  - 12月25日 第4回理事会
    - ・秋季研修大会（防府大会）の反省について
    - ・各部の活動について
    - ・27年度春季研修大会（美祢市）について
    - ・来年度の会費について
    - ・中央研修大会について
    - ・27年度役員選考委員選出について
- 平成27年
- 2月27日 第5回理事会
    - ・各部の活動について
    - ・27年度事業計画について
    - ・27年度春季研修大会について
    - ・27年度役員選出について

## 平成26年度役員名簿

| 役職                         |        | 氏名        | 勤務校          | 全国役員     | 中国役員 | 他団体              |
|----------------------------|--------|-----------|--------------|----------|------|------------------|
| 常<br>任<br>理<br>事           | 会長     | 上田良夫      | 防府市立富海中学校    | 理事/代議    | 理事   | 日本教育会理事          |
|                            | 副会長    | 亀石一郎      | 柳井市立余田小学校    |          |      | 日本教育会理事          |
|                            | 副会長    | 和田章一      | 山口市立二島小学校    | 日本教育会評議員 |      |                  |
|                            | 副会長    | 中川誠一      | 山陽小野田市立出合小学校 | 代議員      | 理事   |                  |
|                            | 事務局長   | 藤井康       | 美祢市立淳美小学校    | 代議員      |      |                  |
|                            | 事務局次長  | 石田靖宏      | 長門市立通小学校     |          |      |                  |
|                            | 庶務     | 椿徹        | 山口市立大内南小学校   |          |      |                  |
|                            | 庶務     | 白井栄作      | 山口市立徳地中学校    |          |      | 組織マネジメント日本教育会評議員 |
|                            | 庶務     | 田中敬       | 周南市立岐陽中学校    |          |      | 学校運営協議           |
|                            | 庶務     | 林清美       | 岩国市立玖珂中央小学校  |          |      | IT               |
| 会計                         | 若佐公子   | 岩国市立玖珂小学校 |              |          |      |                  |
| 事<br>部<br>長                | 法制部長   | 大塚賢二      | 岩国市立美川中学校    | 要請部      | 要請部  |                  |
|                            | 研修部長   | 佃秀樹       | 周南市立菊川小学校    | 研究部      | 研究部  |                  |
|                            | 会報部長   | 新井雅彦      | 萩市立小川小学校     |          |      |                  |
|                            | 調査部長   | 岡田忠雄      | 山陽小野田市立植生中学校 |          |      |                  |
| 副<br>部<br>長                | 法制副部長  | 宇賀一治      | 周防大島町立久賀小学校  |          |      |                  |
|                            | 研修副部長  | 藤田拓二      | 防府市立玉祖小学校    |          |      |                  |
|                            | 会報副部長  | 野村康次      | 山口市立阿知須中学校   |          |      |                  |
|                            | 調査副部長  | 森隆浩       | 美祢市立川東小学校    |          |      |                  |
| 監<br>査                     | (第1地区) | 米村和子      | 上関町立上関小学校    |          |      |                  |
|                            | (第4地区) | 長田和雄      | 下関市立江浦小学校    |          |      |                  |
| I<br>T<br>推<br>進<br>委<br>員 | (第1地区) | 松坂等       | 岩国市立岩国小学校    |          |      |                  |
|                            | (第2地区) | 岡田陽子      | 下松市立花岡小学校    |          |      |                  |
|                            | (第3地区) | 豊島正行      | 萩市立萩東中学校     |          |      |                  |
|                            | (第4地区) | 西川孝文      | 下関市立勝山小学校    |          |      |                  |

25・26年度 27・28年

度

第1地区 --- 岩国・和木，柳井，周防大島，熊毛 …………… 法制部 調査部

第2地区 --- 周南，下松，光，防府 …………… 研修部 法制部

第3地区 --- 山口，萩・阿武，長門 …………… 会報部 研修部

第4地区 --- 宇部，山陽小野田，美祢市，下関 …………… 調査部 会報部

※ 部については2年ごとのローテーション

## 11 あとがき

はじめに、会誌「かなめ（第35集）」を発行するにあたり、御多用の中、原稿を快くお寄せいただきました。山口県教育委員会教育次長 小西哲也 様をはじめとして、各支部の理事の皆様、原稿を執筆いただいた皆様、関係の皆様には深く感謝申し上げますとともに、心から厚くお礼申し上げます。

さて、山口県公立学校教頭会は、「豊かな人間性と創造性を育む学校教育」を研究主題に、本県の研修テーマとして「たくましく生きる子どもの育成と夢を育む学校力の向上」を掲げ、春季研修大会を長門市で、秋季研修大会を防府市で開催しました。特に、秋季研修大会は各分科会の提言発表をもとに、小グループでの活発な協議もあり、会員個々の資質の向上と教頭会全体としての研修の深まりが感じられた大変有意義な会となりました。

会誌「かなめ」は平成20年度から県教頭会ホームページ上での発行ということにしております。会員の皆様には、是非ホームページを開いて、この「かなめ（第35集）」をしっかり読んでいただきたく思います。今年度も秋季研修大会の各分科会の提言内容及び受指導についての概要が掲載されております。この「かなめ」を読むことで、御自分が参加されていない分科会の様子を知り、他の課題についての研修を深めていただければと思います。

その他の内容については、例年を踏襲するものとなっておりますが、今年度の各専門部の活動や各支部の研修成果、課題等の他に、個性あふれる随想など、読んで参考になるもの、思わず笑顔になってしまうもの等たくさんものが詰まっています。また、2年目の教頭先生方の研修である組織マネジメントセミナーの概要と感想も掲載してあります。これも、また参考にしていただければと思います。

終わりに、今年度の「会報」および本会誌「かなめ」の原稿執筆に御協力いただいた全ての皆様に、改めて感謝申し上げますとともに、この「かなめ（第35集）」が山口県公立学校教頭会の先生方の校務・研修の一助となりますことを祈念し、あとがきといたします。

平成26年度 山口県公立学校教頭会会報部(第3地区)

| 役 職   | 氏 名       | 所 属 校               |
|-------|-----------|---------------------|
| 部 長   | 新 井 雅 彦   | 萩 市 立 小 川 小 学 校     |
| 副 部 長 | 野 村 康 次   | 山 口 市 立 阿 知 須 中 学 校 |
| 理 事   | 峯 石 登 志 幸 | 山 口 市 立 名 田 島 小 学 校 |
| 理 事   | 梅 本 節 子   | 山 口 市 立 興 進 小 学 校   |
| 理 事   | 豊 島 正 行   | 萩 市 立 萩 東 中 学 校     |
| 理 事   | 吉 岡 哲 也   | 長 門 市 立 深 川 中 学 校   |